

---

**せっかくバーサーカーに憑依したんだから雁夜おじさん助けちゃおうぜ！**

主

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

せつかくバーサーカーに憑依したんだから雁夜おじさん助けちゃおうぜ！

### 【Nコード】

N7068Y

### 【作者名】

主

### 【あらすじ】

Fate/ZEROの雁夜おじさんがあまりに気の毒！虚淵さん、アンタって人はー！

そんなことを考えつつ眠りについた男は、気がついたら第四次聖杯戦争のバーサーカーになっていた！

「ああ、きつとこれは夢だな。夢なら好き勝手にしてやろう。雁夜おじさんが幸せになるエンディングへと導くのだ！！」

原作知識を生かしつつ、雁夜おじさんのために奮闘する挙動不審な  
バーサーカー。これは彼の夢の物語。

0・0 シリアスブレイカーに、俺はなる！（前書き）

小説家になろうに挑戦してみたかった。後悔はしていない。

アイディア勝負なので文章力やストーリーには期待しないほうが  
いいかもしれない。もちろんシリアスでもなんでもない。

## 0 - 0 シリアスブレイカーに、俺はなる！

±雁夜おじさんサイド±

その夜、間桐家の地下にある蟲蔵にて、間桐雁夜はバーサーカーを召喚した。

生まれつきの素養はあっても魔術の研鑽をほとんどまったく積んでいない雁夜はその肉体に寄生させたおぞましい蟲たちによって魔術師の体裁をとってはいるが、それでも他のマスターに比べれば足元にも及ばない。従って、サーヴァントは狂化によってパラメータのランクアップを行わざるを得なくなり、必然的にバーサーカーを選ぶこととなった。雁夜の文字通り寿命を削った召喚魔術の呼びかけに応え、吐血に塗れた魔方陣から闇の炎を巻きあげて漆黒のフルプレートを装着した大男が姿を表す。その刺さるような禍々しい気迫はまさに狂戦士バーサーカーのものだった。

「や、やった……！成功した……！」

息絶える寸前まで生命力を失った雁夜が、地べたに頬を擦りつけながら亀裂のような笑みを刻む。その様子を後ろから満足そうに眺めるのは、間桐家の初代にして歪みきった人格を持つ老人、間桐臓硯だ。

そう、そこまでは彼らの計画通りであった。

計画から外れたのは、バーサーカーが突如としてその双腕を大上段に振りかぶり、一撃を持って臓硯を亡き者にしたところからであった。

「バーサーカー、何を　　！？」

「うぎゃああああー！」

いかに数百年の時を生きた真性の化け物でも、人間より遙か高みに達した英霊の一撃を堪えることは出来なかった。苦痛と汚辱に塗れた雁夜の姿に愉悦を覚えていた臓硯は、不意を衝いて放たれた恐るべき大破壊力に一瞬とて持ちこたえることなく、醜い悲鳴を上げながら血肉と臓物に為り果てた。音速を軽々と突破した拳は辛うじて消滅を免れた蟲すら散り散りに粉碎し、もはやそれらが臓硯だったことすら判別することはできない。

バーサーカーによる暴走は臓硯を殺すのみにとどまったが、それがもたらした惨状は地下室の崩壊に繋がるほどのものだった。余波を受けて大きく傾いた柱は天井を支えられなくなり、ゴゴゴと重苦しい音を立てながら次々と大きな亀裂を浮かばせる。

「桜が……！」

ガラガラと崩れ行く地下室の床に爪を立て、雁夜が必死に蠢く。なぜバーサーカーが突然臓硯を殺したのかなど、どうでもいいことだった。もはや臓硯が死んだ今、聖杯戦争のような狂ったゲームに参加する意味はなくなつた。しかし、この蟲蔵には桜がいる。救い出してやると誓つた愛する女性の娘が今も蟲どもに囚われ、犯され、精神を食いつくされようとしている。例え自分が死んだとしても、せめて彼女だけは助けてやらなければならない。

（くそっ、動け！今だけは動いてくれ！頼む……！）

必死に齒噛みして前に前に這い進もうとしているのに、召喚によって現界以上に体力も魔力も使い果たした雁夜の肉体は主の言うことを聞かない。ピクピクと痙攣するだけの己の四肢を明滅する視界に入れて、雁夜の視界が涙で歪む。自分のあまりに惨めな最期と、救われることのなかった少女への悔恨を悲観しての血涙だった。

「こんな、こんな結末なんて

うぐっ!？」

ついに諦め、力尽きようとした雁夜の首根っこを何者かがひよいと掴み上げた。その怪力の持ち主は雁夜を軽々と肩に担ぎ、大股で壁に向かって歩き出す。堅牢で冷たい鎧の感触を腹に感じる。

「ば、バーサーカー!？」

それはつい先ほど雁夜が召喚したサーヴァント、バーサーカーであった。彼は何を思ったのか、進行方向にあった見るからに厚い地下の壁を無造作に蹴破る。豆腐のように易々と破壊された壁の穴からわらわらと醜悪な姿形をした蟲がこぼれ落ちてくる。見ているだけで胸糞が悪くなる蟲の滝にバーサーカーがズボリと手を突っ込み何かを探すように上下左右に行ったり来たりする。呆然とバーサーカーの奇行を見る雁夜の目に、藍色の何かが映った。蟲の海の中に沈んでいるソレは、自分が救おうとした幼い命。

「バーサーカー、そこだ!そこにいる!」

バーサーカーが捜しているモノと自分が指さす者が同じである保証はなかったが、霞みゆく雁夜の思考ではそこまで至ることは出来なかった。だが幸運にも、その二つは見事に一致していた。

バーサーカーは雁夜が指さした箇所の手をやると、蟲の中から小柄な裸の少女をそつと掬い上げる。それは、間桐の魔術に無理やり染め変えられたせいで髪色も瞳の色も変わってしまった間桐桜だった。苛烈で非情な魔術処置によって精神は崩壊寸前だが、生きようと必死に息をする瞳は未だ生者らしさを垣間見せている。

(ああ、よかった)

その小さな裸体は蟲によって傷だらけになってはいるが、死に至るほどのものは見つけられない。治療を施せば桜は生きられる。臍硯

が死んだ今、自由に、普通の少女としての人生を歩むことも出来る。

「ば、バーサーカー。頼む、桜を、どうか、生かして、くれ」

もう目も見えない。崩壊する地下の振動も轟音も届かない。事切れる寸前の雁夜は、しかし最期の力を振り絞って己のサーヴァントに懇願する。ついに意識が途切れる最中、

「おk」

という意味不明な返答が聞こえた気がした……。

キバーサーカーサイドキ

Fate/ZEROで一番可哀想なのは雁夜おじさんだと思う。10人中10人はそう思ってるに違いない。

俺はたった今読み終わった小説を本棚に仕舞いつつ、その本の登場人物の一人、間桐雁夜に思いを馳せていた。彼ほどまでに必死の思いで聖杯戦争に参加して、血反吐を吐いて戦い尽くし、望まぬ最期を遂げた男はいないだろう。虚淵さんマジ鬼畜。

「んお、もうこんな時間か」

夢中になって読んでいたせいでもう深夜0時を回っている。明日も朝一で講義がある。なんちゃって大学生ではあるが、単位もやばいしちゃんと講義には参加しなくては。早々に電気を消してベッドに潜り込む。もう少し読了後の何とも言えない余韻に浸っていたかっ



だが、やむを得ない。

「夢の中でいいから、雁夜おじさんが幸せになるストーリーが見てみたいぜ……」

そう呟くと、のび太くんばりに即睡眠の才能を持つ俺が深い眠りに落ちていった。遠くなっていく聴覚に、「言い出しつぺの法則というものがあってだな？」という冷徹な男の声が届いた気がした。

目が、醒める。

気づけば俺はなぜか床に突っ立っていた。視界が狭い。まるで鎧の目庇でも覗いてるかのようだ。あ、いや違う。ホントになんか鎧着てるぞ。しかも全身に。不思議と重くない、っていうかめっちゃ身体に馴染んでる気がする。

視線だけで辺りを見渡せば、なんだかとても身体に良くない空気が充満した密室の中心にいることはわかった。なーんかつい最近似たような部屋の描写を読んだことがあるような？

「や、やった……！成功した……！」

声の源は俺の足元から発せられた。音の発生源を正確に察知できた自分に驚きつつ下に目を向けると、そこにはぐったりと床に倒れ伏しながらも達成感に笑みを浮かべる男がいた。全身余すところなく血だらけで、その様子は死人そのもの。顔面も半分はゾンビみたいに枯れている。何を隠そう、間桐雁夜その人であった。そして彼が俺を見上げながら「成功した」と言っていることから察するに、俺はどうやらバーサーカーになってるらしい。全身に着込んだ鎧と身体中に滾る力　魔力？　がその証左だ。夢で雁夜おじさ

んが幸せになればいいとは思ったが、自分でその手助けをする夢を見る羽目になるとは思わなんだ。

( 待てよ、ここに雁夜おじさんがいるってことは、 )

雁夜おじさんの背後を見れば、暗闇に溶けこむようにしてキモい爺さんがニンマリとしたキモイ顔をしてキモい腐臭をまき散らしていた。出たな諸悪の根源め。言峰綺礼はたしかに悪として歪んではないがどこか愛着が持てる。特に嫌いではない。ギルガメッシュもゲートオブバビロンとかかつこいいいし、厨二心をくすぐられるので純粹悪には思えない。だが間桐臓硯、テメーは駄目だ。てめーは俺を怒らせた！

( 油断している今こそ好機！雁夜おじさんのトゥルーエンドのためにも死ねやオラァ！！ )

夢なら夢で、俺は自分がやりたいようにするだけだ。つまり、雁夜おじさんの願いを叶えてやるのだ！

背中から魔力を噴出し、一挙動で臓硯の眼前まで接近。握り合わせた拳を振り上げ、バーサーカーのスキルである筋力強化を最大限に生かして思い切り叩き落す。ぎゅおん、と空気をねじり切る爆音の尾を引き、拳は隕石のように臓硯の脳天にクリーンヒットした。

「うぎゃあああああ！！」

芋虫のような蟲どもが飛び散るが、それらも全て粉碎する。一片だつて残してはやらん。絶対に許さんぞ虫けらども！じわじわとなぶり殺しどころか一瞬で消滅させてやる！

俺の気合の一撃によって臓硯は跡形もなく死んだ。夢のくせにリアリティがあるじゃねえか。ちよっと吐きそうだ。うえっ！

(ふう、これで一件落ちちゃ……おお？しまったやりすぎたか)  
すこーし加減を間違えたらしく、先の一撃で地下室が崩壊寸前だ。  
こりゃいかん。さつさと雁夜おじさんと同じく地下室に閉じ込めら  
れているだろう桜ちゃんを救出せねば。

とりあえず雁夜おじさんが落ちてくる瓦礫の下敷きにならないよう  
に回収しておく。耳元で「バーサーカー!?」と困惑の音が聴こえ  
るが、気にしない。というか、どうも上手く喋れないようだ。さっ  
きからあーとかうーとかいった小さな呻き声しか出せない。どうや  
らバーサーカーになってるせいで俺の思考が狂ったりしないまでも、  
言葉を発することはできないらしい。夢のくせにリアルだな。まあ  
無くても大丈夫だろう。最悪、筆記で意思疎通も出来る。

(桜ちゃんはこの辺かな？お、なんか当たりっぽいな)

適当に目の前の壁をぶっ壊してみると、ビチビチと震える蟲が滝の  
ように流れだしてきた。この中にいそうな感じだ。早く救出してあ  
げないと気の毒だ。

「バーサーカー、そこだ！そこにいる！」

視界の隅で雁夜おじさんが一点を指さす。さすがおじさんだぜ。

おじさんの差した場所をクレーンゲームみたいにそっと掬うと、  
何かを掴んだ感触がした。ひどく冷たいが、人間の子ともっぽい。  
案の定、それは桜ちゃんだった。レイプ目になってポーツとしてい  
るが懸命に肩を上下させて息をしている。無事のようだ。ホッと安  
堵していると、雁夜おじさんがぶつぶつと何か囁きだした。

「ば、バーサーカー。頼む、桜を、どうか、生かして、くれ」

言われなくともそのつもりだ。こんな陰気臭い地下室とはスタコラサツサだぜい！バーサーカーはクールに去るぜ！！

「おk」

おっ？ちよつとした発言なら何とか出来るのか。これは嬉しい発見だ。意思疎通がしやすくなるぜ！臓硯も死んだし、桜ちゃんも助けだした。後は間桐家当主の間桐 鶴野が問題だが、こいつはワカメの父親だけあつてヘタレだ。どうとでもなるだろう。臓硯が死んだと知ったら嬉々として泣いて喜ぶかもしれん。そうなれば雁夜おじさんとも仲直りで、桜ちゃんも普通の暮らしができるようになるかも。

気絶した二人を担ぎながら、俺は今後の二人の明るい未来について考えを膨らませ始めていた。

あれ？桜ちゃん助かったんなら俺もう必要なくね？

±雁夜おじさんサイド±

「う、ぐ、」

顔に当たった日光に急かされて泥のような眠りから覚醒すると、そこは自分の寝室だった。日光を浴びたのは久しぶりだった。臓硯が死んだせいなのか、体内の蟲は今までの暴れっぷりなど嘘のように静まっており、悪くて痺れる程度に収まっている。その痺れが脳を刺激し、昨夜何が起こったのかを想起させる。日光を遮るように手

をかざせば、その手の甲に令呪が宿っているのに気付く。まだ、バーサーカーとは繋がったままだ。サーヴァントは魔力を常に消費する。口惜しいことだが未熟な俺では蟲の助けがないとそれは不可能のハズ。

「いったい、何がどうなつて……?」

「雁夜おじさん、大丈夫?」

「ッ! 桜ちゃん!?!」

耳元で発せられた少女の声に飛び起きる。そこには、椅子に座つてこちらを心配そうに見下ろす桜の姿があつた。その瞳にも肌にも元の少女然とした健康的な張りがあり、蟲に蹂躪されていた過去を感じさせないほど快復している。その様子に、雁屋は今までの地獄のような日々全てが報われた気がした。否、事実報われたのだ。雁屋の当初の目的　　桜を救い出すことは、ここに果たされたのだ。

(もうこの娘は絶対に不幸な目に合わせない!)

内心に決意し、桜を抱きしめようと身を乗り出し、

コンコン

「あつ、ご飯が出来たみたい。ちょっと待っててね、雁屋おじさん」

腕の間をすりりと抜けて桜がノックされた扉へ小走りで駆け寄る。それを少し残念に思いながら、年頃の少女のような仕草を見せてくれる桜の姿に雁夜は優しげなほほ笑みを浮かべた。

(聖杯戦争などクソ食らえだ。令呪もさっさと教会で処理してもら

おう。遠坂時臣に桜ちゃんを間桐に譲ったことを後悔させてやりたいという願いはあるが、それは聖杯を通さなくても出来る。どのみち、すぐに暴走するような強大なバーサーカーを制御できる自信はこれっぽっちもない。きつと戦いの途中で惨めに力尽きてしまうだろう。それより、なるべく桜ちゃんの近くにおいて彼女を護ってやりたい )

「ご飯作りご苦労様。今開けるから待っててね、バーサーカー」

「は？」

呆けた声をあげた雁夜の眼前で、桜がよいしょとドアノブを捻る。ギィ、と古風な音を立てて開いた扉の向こうから、漆黒の気配がズルリと侵食してくる。雁夜がゴクリと息を呑む中、その気配の持ち主が全体を表す。

全身を黒いフルプレートアーマーで覆った優に190を超える長駆の男 雁夜が昨夜召喚し、目にも留まらぬ速度である臓硯をこの世から消し去ったサーヴァント、バーサーカー。

その威容と迫力は何者が見ても怯えすくむほどのものだったが、雁夜は別の意味で身体を強張らせて硬直していた。

当然だ。なぜなら眼前のバーサーカーは エプロンを着ておかゆの載ったお盆を持っているのだから。

理解を越えた光景に、雁夜はただあんぐりと口を開けて固まるしかなかった。

「雁夜おじさん、おかゆ冷めちゃうよ？せっかくバーサーカーが作  
ってくれたのに」

「グルルルル（肯定）」

「なにそれこわい」

0・0 シリアスブレイカーに、俺はなる！（後書き）

小説家になろうでも何か書いてみたかったです。思いつきの作品  
だけど、けっこうスラストラとアイディアが浮かんでくるので続けて  
みようと思います。Fate/Zeroの小説は持つてはいますが  
読んだのは2年前です。アニメを見ながら思い出しつつ、ボンヤリ  
としたところは小説をまた読み直しながらちよこちよこ書いてい  
きます。



1 - 1 未来の巨乳キャラを守るんだ！(前書き)

一発ネタを連載作にすることの大変さを書きながら思い知る。

## 1 - 1 未来の巨乳キャラを守るんだ！

±雁夜おじさんサイド±

レンゲで掬ったおかゆをこちらに向けて「あーんして」とばかりに迫るバーサーカーからもぎ取ったおかゆをひたすら口にかっ込む。塩加減が絶妙でなかなか美味しいのが腹が立つ。米の旨みを存分に引き出す質素かつ贅沢な味わいは日本人の味覚にクリーンヒットする。見た目は西洋騎士のはずなのにおかゆを作れるというのは理解に苦しむ。聖杯からの情報にはそんなことも含まれているのだろうか？とりあえず精力をつけなければと頬を膨らませてもしかやもじゃと朝食を咀嚼する雁夜の前では、桜がバーサーカーに肩車されてキャツキヤと喜んでいた。未だ全快には程遠いが、笑顔を見せるだけの余裕が生まれたのは良いことだ。バーサーカーの方も乗り気のように暴れ馬のように装いながらもまるでお姫様を扱うように丁寧に相手をしている。「ぐるる」とか「うごご」とかしか声らしい声を発しないが、どうやら子ども相手の相手を出来るくらいの理性は残っているらしい。

(こいつ、本当にバーサーカーなのか？)

少なくとも雁夜にはそうは見えなかった。肌を突き刺すプレッシャーも狂戦士そのものだが、言動はその正反対だ。面倒見のいい近所のお兄さんと言えばちょうどいいだろうか。召喚した直後に暴走した際はマスターの制御すら受け付けない凶悪なサーヴァントを引いてしまったのかと不安になったが、もしかしたら臍硯をマスターである俺の敵と瞬時に理解して排除したのかもしれない。マスターに負担をかけないために魔力消費を最小限にセーブしているらしいバ

「サーカーの背中を眺め、雁夜は空になったお椀を枕元に置いた。バーサーカーのセーブと食欲が満たされたおかげで、死人のような干からびた肌に若干の張りが戻る。

（理性のあるバーサーカー、か。狂化でパラメーターが向上しつつも思考能力がほとんど低下していないなんて、どういう理屈なんだ？）

冷静に考えれば、これは反則とも言える事例だ。バーサーカークラスの有利的な特性だけつまみ食いしてデメリットはほとんど無視なんて他のマスターが聞けば怒り狂うだろう。サーヴァントシステムを開発した臓硯ならば何かしらの検討がついたかもしれないが、今となってはそれも叶わない。叶えたいとも思わない。雁夜にとっては己のサーヴァントが意外に従順そうだとわかっただけで十分だった。

（バーサーカーの制御に問題はなさそうだ。残る問題は、兄さん

現・間桐家当主、間桐鶴夜の存在か）

奴は臓硯の傀儡のような男だ。臓硯の指示通りに動き、立ち向かうどころか意見することも出来ない操り人形。臓硯亡き今も、その意思を継いで桜を時代の間桐家のための贄にしようと画策するかも知れない。急造の魔術師である俺と違って鶴夜は長年修練を積んだ生粋の魔術師だ。正面きって戦っても勝ち目はない。だが今の俺には強力なコマがある。

（一応、説得はしてみよう。奴も臓硯の被害者ではある。だが聞き入れなければ、最悪、バーサーカーを使って奴を……）

「ぐるるっ」

「ん？な、なんだバーサーカー？……この手紙を読めっていうのか？」

実の兄の殺害も視野に入れだした俺の肩をぽんと叩いたバーサーカーが一通の手紙を手渡ししてきた。その手は心配するなと言うように親指がぐつと立てられている。この英霊の馴れ馴れしさというか見た目とのギャップというか英霊らしかぬ日常じみた所作には、雁夜はもう驚かなくなった。

手紙の差出人は鶴夜だった。

『なんかスゲー怖いお前のサーヴァントがめっちゃ睨んでくるし、ジジイもくたばったらしいし、もう俺もゴールしていいよね？というわけで俺は生まれて初めての自由を満喫しに自分探しの旅に出るので絶対に探さないで下さい。絶対だぞ？絶対だからな？』

P・S 桜をよろしく^^』

「あんのクソ兄貴！」

ふざけた手紙をグシャグシャに丸めて部屋角のゴミ箱にシュウウ

ツツ！！超！エキサイティン！！

まだ満足に動かせない腕のせいで目標を逸れて床に落ちた手紙をゴミ箱に入れ直すバーサーカーを尻目に、盛大な肩透かしを食らった雁夜はがつくりと頭を抱える。

色々と言いたいこともあったが、すでにいない人間に言っても仕方がない。元より、先に間桐家から逃げ出したのは雁夜の方なのだから、鶴夜を強く責める資格が自分にもないことも重々承知していた。大きいため息を付いて思考を切り替えると、「さて、これからどうするか」と雁夜は独りごちた。桜の救出という目的は果たしたし、目下の障害と思った兄もとんずらこいた。遠坂時臣に桜にした仕打ちを思い知らせてやるうと心中で渦巻いていた執念も、無事な桜を

見ていると小さくなってゆく。残す問題は 自らのサーヴァントと聖杯戦争だ。正直に言って、今の自分に聖杯に叶えてもらうような大それた願いなどない。そうになると、バーサーカーはお荷物以外の何者でもない。魔力を食いつぶす上に敵襲の危険も誘う厄介者だ。

はしゃぎ過ぎて疲れたのか足取りのおぼつかなくなった桜を優しく支えるバーサーカーにちらりと流し目を送る。雁夜が眠っている間に桜は自分の命の恩人であるバーサーカーにすっかり懐いてしまっていた。

(悪い奴ではなさそうだし、心苦しくはあるが、自害でもさせて消えてもらった方が )

「ううっ…」

「ぐっぐっ！？」

「っ！？桜ちゃん!？」

突然、その場に倒れ伏した桜とそれに慌てふためくバーサーカーに悪寒を感じて駆け寄る。

抱き上げれば、桜の顔色は蒼白になり、全身から玉のような汗が吹き出していた。唇が急激に乾き、肌から潤いが見る間に抜け落ちてゆく。まるで雁夜が今の状態になるまでを早送りで見ているかのようだ。

「こ、これは……!」

思いつく理由は1つだけ 臓硯の蟲による強引な施術の影響だ。臓硯という頭脳を失った蟲どもが暴走し始めている。サーヴァント制御を目的として植えつけられた雁夜の蟲と違い、桜のそれは臓硯が理想とする次代の間桐を生む母体育成を目的としている。臓硯の

コントロールを離れた蟲どもは目的を見失い、桜の体内で暴れまわっているのだ。

「臓硯め……死んでもなお桜ちゃんを苦しめるのか！」

荒い息を吐く桜を自身のベッドに寝かせながら、雁夜は憤怒に燃えた。

バーサーカーがどんなに魔力消費をセーブしても、すでに蟲によってポロポロに食いつくされた雁夜の身体は一年も持たない。後悔はない。そうなることを承知した上で臓硯に取引を持ちかけたのだ。しかし、桜は違う。

(この娘には、真つ当な人生を歩ませてやりたい)

刻々と息を荒くする桜の頬を撫でる。ザラリとした粗い肌触りに臍を噛む。

間桐家の魔術を知る臓硯も当主もいない今、あるかどうかもわからない治療法を捜している猶予はない。あと数日の間に、蝕まれた桜を癒さなければならぬ。それほどの奇跡を起こせるものが必要だ。一度目を閉じて覚悟を決めると、雁夜は背後に向き直る。そこには従者然として雁夜の後ろに控え立つ騎士　　バーサーカーがいた。禍々しく燃える赤い瞳を力を含めて真つ直ぐに見つめる。

「バーサーカー、聖杯に願うことが出来た」

バーサーカーは黙して雁夜の口から命令が下されるのを待つ。まるで言わなくても雁夜の意味が通じているかのように。雁夜は爛々とキラつく赤い双眸の奥に同じヒトの心の温かさを感じた。

「桜を救う。そのために、俺はこの命を使い果す。協力してくれ、

「バーサーカー」

幼い少女のために命をかける。清らかで強い願いを掲げた雁夜の顔には、今までにない熱い信念と誇りが確かに芽生えていた。その願いに、黒鉄の騎士は片膝を突いて応える。左胸に叩きつけた右拳がガシャンと力強い音を立てる。主君への忠誠を示す返礼だった。

ここに、桜の命を救うために聖杯を目指す者たち  
間桐雁夜 /  
バーサーカー陣営が誕生した。

✪バーサーカーサイド✪

雁夜おじさんを助けるのが目的だったんだがなあ。今はどうにかこうにかして魔力消費を抑えてるからキツくないだろうけど、俺が本気で戦うことになったらおじさんの寿命ゴリゴリ削っちゃうんだぜ？血反吐吐いて地べたでジタバタ痙攣だぜ？……まあ、本人が望むのならいいか。凄くさっぱりした顔してるし。それにこのまま桜ちゃんが死んじゃったら雁夜おじさんの今までの決死の努力も水の泡だしな。俺としても、例え夢であったとしても小さな女の子が苦しんで死んでいくことを見過ごしたくない。この夢から覚めたら最悪に目覚めが悪いことになる。

しゃーない！ここは一つ、騎士つぱくカツコつけた返礼をして、おじさんと一緒に戦うことにしますか！

1 - 1 未来の巨乳キャラを守るんだ！（後書き）

次話はまだアイディア段階です。この駄文を読んでくれる殊勝な方がいましたら、どうか気長に待ってくださいあゝゝ



## 1 - 2 黒ファントムに侵入されました(前書き)

ひゃあ！感想だあ！

まさかこんなに大それた評価をされるとは思ってもみなかった。感動した！コメントでもあるように、このSSは半分はネタ、半分は勢いで出来ています。原作に忠実な設定なんてどこ吹く風だし、過度な期待は厳禁です！それでも大丈夫なイケメンさんだけ見て行ってね！ゆっくりして行ってね！

## 1 - 2 黒ファントムに侵入されました

キウエイバーサイド

深夜、極東日本の地方都市、冬木市の港湾区の一部を占める広大なコンテナターミナル。

魔術によって人払いがされたその地で、四体のサーヴァントが睨み合いの体制に入った。四体全てが世界に名の知れた遙か昔の英傑豪傑。総身が震え上がるほど殺気と緊張に支配された空間で、僕ことウェイバー・ベルベットはひたすら気絶だけはすまいと己を奮い立たせ、この戦争に参加していなければ決して目にするこののできない本物の英霊たちを網膜に刻みつけていく。

最初に戦っていた銀髪の女のサーヴァントセイバーと、憎つくき講師ケイネス・エルメロイ・アーチボルトのサーヴァントランサー、そして突然その場にしゃしゃり出て何を思ったのか自分の軍門に降るように言い放ち、あるうことが「物は試し」で真名をばらしてくれやがった僕のハチャメチャサーヴァントライダー。そして、自らを差し置いて王を名乗るのが気に食わないとポールの上に現れた金ピカのサーヴァントアーチャー。この戦争の根幹を作った遠坂の当主が召喚した、圧倒的な存在感を撒き散らすライダー以上の暴君。

「我が拜謁の栄に浴してなお、この面貌を見知らぬと申すなら、そんな蒙昧は生かしておく価値すらない」

アーチャーに真名を尋ねたライダーにキレた沸点の異様に低いアーチャーが、昨夜に遠坂邸で見せた多数の宝具の射出という不可解な攻撃を再現しようとする。こちらに向けられた黄金の宝具の矛先に思わず「ひっ」と情けない悲鳴を上げてしまう。

こんな展開にしてくれやがったライダーに撤退をさせようと口を開きかけ、

「む？」

ライダーが唸った。跳ね上げられた眉の下の鋭い眼光がアーチャーから外される。見れば、四体のサーヴァント全員が同じ方向に目を向けていた。全員の視線が集中する中、黒い炎を巻きあげてまた新たなサーヴァントが姿を表す。

「な、なんだアイツ……」

それは漆黒のサーヴァントだった。全身を隙なく覆うフルプレートアーチャーは光すら吸収するほどに黒く、無骨な兜の目庇だけが紅蓮に燃えていた。全身から放たれる殺気と漲る魔力は間違いなくバーサーカーのものだ。

「……なあ征服王。アイツには誘いをかけんのか？」

「誘おうにもなあ。ありゃあ、のっけから交渉の余地なさそうだなあ。で、坊主よ。サーヴァントとしちゃどの程度のモンだ？あれは」

「ま、待てよ！あいつ、幻惑の呪いか加護を受けてるみたいでよく見えないんだよ！だけど……パラメーターはほとんどAだ。それくらいなら、見える」

「あんま参考にならん情報だなあ」

「うるさい！他の奴も似たようなもんだよ！……たぶん」

時折姿がボヤけて見えるが、英霊固有の幻惑スキルが狂化によって弱まっているのか、能力値くらいは僕にも判別できた。バーサーカークラスの恩恵を得たあの狂乱の英霊は、理性をなくす代わりにパ

ラメーター数値が向上されている。

この場にいる他のマスターとサーヴァントも同様のようで、ゆらゆらと陽炎のようにブレて見えるバーサーカーに軽く驚きこそすれ、中途半端になっっているらしい幻惑スキルはすでに看破してじつと闘入者の出方を見ている。

「どうやら、あれもまた厄介な敵みたいね……」

「それだけではない。四人を相手に睨み合いとなっては、もう迂闊には動けません。しかし、あの鎧、どこかで……」

セイバーとそのマスターが小声で何事か相談している。きっとこの厄介な状況を危惧しているに違いない。僕も早くライダーに掛けあってさっさと逃げ出そう。こいつらが一気に戦いをおっぱじめたら戦場のど真ん中にいる僕は即座に肉片になってしまふ。それだけは嫌だ！ライダーが断ったら令呪を使っても命令を聞かせてやる！

「ライダー、早く」

「誰の許しを得て我を見ておる？狂犬めが……」

え

底冷えがするような怒気を放つ声が響く。振り返れば、自分を凝視するバーサーカーをアーチャーが憤怒の眼差しで睨みつけていた。ライダーに向けていた宝剣と宝槍がバーサーカーに照準を変える。

「せめて散りざまに我を興じさせよ。雑種」

「んなっ!?!」

英霊の最高の切り札である宝具をいとも人目に簡単に晒し、あまつさえ捨てるように射出するデタラメな攻撃。二つの宝具がバーサーカーに直撃し、ドデカイ爆発を一度起こした。爆風がぶわんと身体を叩きつけて、視覚と聴覚を奪う。

あんなものを食らえばいかなサーヴァントであっても 待てよ、“一度”？どうして爆発は一回だけなんだ？

「……奴め、本当にバーサーカーか？」

「狂化して理性をなくしているにしては、えらく芸達者な奴よのう」

「んな、アホな」

霞む視界で見れば、なんとバーサーカーが先ほど弾丸の如き速度で放たれた黄金の宝剣を握っていたのだ。他の英霊の宝具を、一瞬で掴みとり、己の四肢の延長のように操る。そんなもの、神業の域を超えている。狂化してなお身体に染み付いた武芸は、あのサーヴァントがいかに優れた英霊なのかをひしひしと伝えてくる。

「その汚らわしい手で、我が宝物に触れるとは……そこまで死に急ぐか、狗ッ！」

「そんな、馬鹿な……」

白いこめかみに青筋を浮かべて怒り狂ったアーチャーの背後に、一斉に輝く宝具が出現した。その全てが掛け地なしの世界の至宝、最高級の宝具だ。

「その小癩な手癖の悪さでもって、どこまで凌ぎきれるか さあ、見せてみよ！」

空気を震わせる怒声を合図に、宝具の群れがバーサーカーに向かっ

て放たれた。ズドン、バガン、と立ち並ぶ巨大なコンテナを次々と路面ごと抉り吹き飛ばし粉砕し、コンクリも鉄もアスファルトも全てを塵に変えてゆく。大音響と大閃光の連続炸裂に頭蓋の震えが止まらない。

そんな、アーチャーの有り得ない連続攻撃に晒されたバーサーカーもまた、ありえない防御を行った。襲い来る宝具をいとも簡単に切り払い、撃ち落とし、さらにはより強い宝具を選別して、即座に持ち変えて次の攻撃を払いのける。それらを全て一秒にも満たない刹那の間に何度もやってのけているのだ。当のバーサーカーの動作にも焦燥は一切感じられず、夢を見ているように流れるような練武でもってひよひよいと疾駆している。まるで身体に染み付いた反射神経を信頼し、身を任せているかのようだ。あんなサーヴァント、絶対に馬鹿げている。

「　　どうやらあの金色は宝具の数が自慢らしいが、だとするとあの黒いやつとの相性は最悪だな。黒いのは武器を拾えば拾うだけ強くなる。金色も、ああ節操なく投げまくっていけば深みに嵌る一方だろうに。融通の利かぬ奴よのう」

この戦いをふむふむと冷静に分析してくれやがるライダーの台詞に耳を傾けていると、唐突に爆音が止まった。アーチャーが宝具の全てを射出し終えたのだ。急激に静まる夜気の中、ひゅんと風切り音を立ててバーサーカーが何かを投擲し、アーチャーの足場のポールをバラバラにする。足場を寸断される前に驚異的な俊敏さで跳ねたアーチャーがガシャンと鎧を力ちならしてその場に着地する。

ブチブチ、という布の切れるような音が聞こえた気がした。再びバーサーカーに向けられたアーチャーの双眸は憤怒に見開かれていた。

「痴れ者が……。天に仰ぎ見るべきこの我を、同じ大地に立たせるかッ。その不敬は万死に値する。そこな雑種よ、もはや肉片一つ残

さぬぞー！」

「「「「「「……！！」「」「」「」

その場にいる全員が息を呑む。アーチャーの背後の空間に、30を超える超常の宝具が出現したからだ。いつも偉そうにふんぞり返っているライダーすら目を見張るほどの有り得ない光景　大量の宝具の一斉解放の前触れに、僕の意識はスパークを起こして今にも落下しそうだ。

だが、

「……貴様ごときの諫言で、王たる私の怒りを鎮めると？大きく出たな、時臣……」

おそらくマスターが制止に入ったのだろう。アーチャーは宝具の解放を止めた。だがマスターの言葉を持ってしても怒り冷めらやぬアーチャーは、背後の宝具を消すときも忌々しそうにふんと鼻を鳴らして踵を返す。

「……命拾いをしたな、狂犬」

興味も失せた、というような傲岸不遜な横顔をバーサーカーに向けると、アーチャーが居並ぶ三体の英霊をじろりと流し目で睥睨する。

「雑種ども、次までに有象無象を間引いておけ。我と見えるのは真の英雄のみで良い」

心底偉そうに言い放つと、アーチャーは音も立てずに霊体化してこの場を後にした。いなくなったことを確認した途端、ぜえと大きな息が漏れる。いつの間にか息をすることを忘れてしまっていた。息

をできるうちにしておこうとゼーはーと何度も深呼吸をする。これから何度呼吸が止まることになるかわかったもんじゃない。

「フムン。どうやらアレのマスターは、アーチャー自身ほど剛毅な質ではなかったようだな」

何を呑気そうにニヤニヤしながら顎を撫でてやがりますかコイツは。まだあのバーサーカーが残ってるんだよ！

「心配するな坊主。どうやら次の相手はもう決まっているようだぞ？」

「へっ？」

兜の目庇の中でキラキラと光る真つ赤な双眸が、すかさず次のターゲットに向けられる。まるで最初から狙っていたのはお前だとも言つかのよう、アーチャーから奪ったままの宝剣の切っ先をセイバーただ一人に向ける。いきなり鋭い視線を投げつけられたセイバーがぐつと表情を険しくして剣を構えなおした。

「……Hi……」

地の底から湧いたような戦慄の声で、バーサーカーが低く唸った。初めて耳にするバーサーカーの声音は、ぞつとするほど掠れたものだった。

何の予備動作も見せず、ズドンと後方に爆煙を巻き上げたバーサーカーが一瞬でセイバーに肉薄する。野獣じみた乱暴な動きから放たれた一撃は、しかし、芸術の如き冴えを見せてセイバーの防御の剣に振り下ろされる。

火花を上げてぶつかり合った宝剣を中点に、兜をビリビリと震わせる声量で狂戦士が叫び声を上げた。セイバーの鼓膜を破らんばかり





1 - 2 黒ファントムに侵入されました（後書き）

かっこいいバーサーカーだと思った？残念、カッコ悪いバーサーカー  
ーちゃんでした！

### 1・3 健康は毎日の食事から(前書き)

なんでこんなに評価されてるの……。なにこれ怖い。でも嬉しい！  
ヒヤッホウ！

やっぱり皆、雁夜おじさんは幸せになるべきだと思ってたんだね。  
ようし、必ず幸せにしてみせるぞ！でもあんまりプレッシャーかけ  
ないでね！メンタル弱くてごめんね！

### 1 - 3 健康は毎日の食事から

港湾区画にて戦闘が起こる半日前

±雁夜おじさんサイド±

「私を助けてくれた後ね、バーサーカーがずっと頭を撫でてくれたの。頑張ったねって」

「アイツ、そんなことしてたのか」

「まるでテレビに出てくる正義の味方みたいに、かつこ良かった」

「ははは、アイツが正義も味方か」

「バーサーカーはね、ヘルメット脱いだらきつとイケメンなの」

「え？あ、ああ。かもしれないね」

「私ね、大きくなったら、バーサーカーと……すー」

「……アイツとは一度きつちり話しておく必要があるな」

桜が寝息を立て始めたことを確認すると、雁夜は左手の令呪を見ながら静かに呟いた。

倒れてからずっと付かず離れず看病をしてきた成果なのか、桜の衰弱の進行は落ち着き、容態も安定してきた。しばらくは大丈夫そうだ。ほっと安堵の息をつき、バーサーカーが用意した冷たい水でタオルを搾り、額にそっと置く。「バーサーカー……」という小さな寝言に雁夜の口元がひくひくと痙攣する。いつの間にか雁夜は桜のことを娘のように考え始めていた。

(バーサーカー、ちょっと話があるんだが)

桜の件と今後の戦いのことを相談しようと、己のサーヴァントを念

話で呼び出す。しかし、

「……バーサーカー？どこに行っただ？」

反応は返ってこなかった。階下に降りて厨房を覗いてみるが、綺麗に拭き上げられたお椀とこれから料理をしようと用意された調理器具だけが佇んでいるのみだ。バーサーカーは使用済みの食器類を持って降りたので、てっきり厨房で洗い物でもしているのかと思っていた雁夜は、己のサーヴァントの気配がすでに間桐邸にないことに今さらになって気付いた。桜に付きつきりだったせいで、バーサーカーの外出を察知出来なかったのだ。途端、雁夜の背中を寒気が走る。

（まさかアイツ、一人で他のサーヴァントと戦うつもりか！  
？）

言動では判断しにくいだが、鎧に刻まれた膨大な傷の武勲と全身から滲み出る強者の風格を見れば、あの英霊がかつて武の頂点まで上り詰めた戦士であることは容易に想像がつく。雁夜が傷一つ負わせることも叶わない臍硯をたつた一撃で殺したことがその証だ。他の英霊はまだ二体しか見ていないが、おそらく並大抵の英霊なら物の見事に切り伏せられるほどの実力を秘めているに違いない。にも関わらず雁夜が焦燥に狩られているのは、その二体の内の一体が原因に他ならない。

（遠坂時臣のサーヴァント　アレはやばい！危険過ぎる！）

使い魔を使って垣間見た黄金のサーヴァント。指先ひとつ使わず、造作もなく、それこそ羽虫を始末するようにアサシンを殺してみせたアーチャー。一目見て、格の違いを思い知らされた。いくらバー

サーカーが強くて、何の対策もなしに戦いを挑むのは無謀だ。もしも初っ端からアーチャーとぶつかってしまえば、勝ち目は薄い。刻印蟲に蝕まれた身体を引きずり、雁夜はバーサーカーを追走しようとうと玄関扉に走りより、

「ぐるる〜」

「おわっ！？ば、バーサーカー！無事だったか！」

ガチャ、と目の前で扉が開いた。たたらを踏んで見上げた先には、眩しい日光を背に漆黒の騎士が佇んでいた。雁夜にはその呻き声が「ただいま」と言ったように聞こえた。そのあっけらかんとした健在っぷりに、上下させていた肩をガクリと落として安堵する。

「お前、マスターに黙ってどこに行ってたんだ！？行動するならするで前もって教え　おい待てなんだそれは」

バーサーカーの両手にぶら下がったソレらを目にした雁夜の表情が固まる。それは、食料で一杯になった買い物袋であった。律儀にエコバッグを使用している。

「お、おまつ、これっ、なにしてっ！？」

顔を激しく引き攣らせて汗を垂れ流す己のマスターに、バーサーカーは猫が獲物を魅せつけるように買い物袋を雁夜の目の高さまで掲げ上げる。「特売！」「採れたて新鮮！」「栄養満点！」というシールが貼られた食材がこれでもかと詰め込まれていた。ぐるる！と低く唸ったバーサーカーがえっへんと胸を張る。「これで美味しいもん作ってやるからな！」と言っているかのようだ。

「ば、ば、ば、」

唇をわなわなと震わせ、雁夜は言葉にならない言葉で呻く。半端者の魔術師である雁夜も、魔術の秘匿は絶対の掟であることくらいは理解している。というか、そもそも戦争中にサーヴァントが呑気に買い物に行くこと事態がどうかしている。サーヴァントは霊体化していると現実の物質に触れないので、買い物をするには実体化するしかない。ということとは、バーサーカーはこのままの姿で買い物をしてきたということになる。誰に見られているかわからないし、他のマスターやサーヴァントから狙われたら一大事だ。もちろん雁夜と桜のためを思つての行動ではあるだろうが、非常識過ぎるだろ常識的に考えて。

雁夜の頭の中で驚愕と困惑とやり場のない怒りがグルグルと輪になつて駆けずり回り、

「バター!!」

バターになつて雁夜の精神と共に溶けた。奇声を上げてバタリと気絶したマスターを見て、バーサーカーは「うご?」と小さく首を傾げた。まったく可愛くなかつた。

✠アサシンサイド✠

『どうした、アサシン。報告しろ』

「は、はい。申し訳ありません。間桐邸には、異常は、ありません。ぐすつ」

『……そうか、わかつた。これからも監視を怠るな。動きがあれば逐次報告しろ』

「心得ております、我が主」

涙ぐんだようなアサシンの湿り声に、念話の先にいる綺礼は一瞬だけ懷疑の色を声に滲ませたが、他愛ない聞き間違いと断じて切り捨てた。アサシンが泣くなど有り得ないのだ。……本来ならば。

雁夜の懸念は的中していた。言峰綺礼のサーヴァント、真名をハサン・サツバーハ。遠坂邸で脱落したように見せかけたアサシンの分身であり、間桐邸を監視する役目を負ったサーヴァントだ。バーサーカーの中の人はすっかり失念しているが、アサシンはその『気配遮断』のスキルを生かし、雁夜を含めた聖杯戦争の参戦者たちに日夜鋭い眼差しを向けていたのだ。

「うっ……ぐすっ……」

そんな彼が、泣いていた。髑髏の仮面の隙間という隙間からジョウウ口のようにダバダバと落涙し、ひっくひっくと背中を震えさせている。

「まさか、自分の英霊にお使いに行かせるようなマスターがいようとは……。いや、サーヴァントを使い捨てにする私たちのマスターも似たようなものか。バーサーカーの英霊よ、お前と私たちは似たような境遇にあるのだな……」

アサシンには、オツムの足りないバーサーカーがマスターにこき使われているようにしか見えなかった。およそ英霊に対する扱いとは思えないひどい待遇に晒されている同じサーヴァントの姿が、アーチャーの露払いのために使い捨てにされる自分たちと重なった。同じように冷遇されているサーヴァントの背中が間桐邸の玄関に消えて行くのを何もせず見送りながら、一度鼻をすすする。

「バーサーカー、今回のことは報告しない。どうせ報告しても我が



主に鼻で笑われるだけだろうしな。……お互い敵同士だけど、頑張るうな」

そう呟くと、アサシンはまた鼻をすすった。彼は暗殺者のくせに情に熱く、そして馬鹿だった。

キバーサーカーサイドキ

うーむ。この家の冷蔵庫にろくなもんがなかったから外に調達に行つたんだが、帰ってきたら雁夜おじさんが硬直してそのまま昏倒してしまった。桜ちゃんの看病で疲れていたんだろう。

持ち前の筋力で雁夜おじさんの腰をひよいと抱え、客間の大きなソファに横たえさせる。うーんうーんと顔を顰めて唸っている。悪い夢でも見ているのかも知れない。よほど心労が溜まっているんだろう。気の毒に。

風邪を引かないようにタオルケットをかけてあげると、俺は買ってきた食料と洗いたてのエプロンを持って台所へ歩を向ける。

幸いなことに今日は商店街上げての緊急特売日だった。何でも、とびつきり美人な西洋人二人が訪れたため、その美貌にマイってしまった商店の店主たちが舞い上がって大安売りを始めたらしい。十中八九、アイリスフィールとセイバーだろう。あの二人のおかげで、全身に鎧を着込んだ俺が買い物に来ても「あの美人さんたちといい鎧の大男といい、今日は街でなんかイベントでもあるのかね？」と笑われる程度で済んだ。今は聖杯を狙うライバルだが、その点は素直に感謝しよう。

戸棚から鍋を取り出し、水を入れて火にかける。その間に材料を切つて下ごしらえをおく。一人暮らしが長かったので料理の腕にはそ

こそこ自信があるし、ユーキャンで調理師免許を取ったので献立のレパートリーも広い。資格マニアでよかったぜ。

「~~~~~」

あらゆる野菜がまな板の上で瞬時に切り刻まれていく。包丁がまな板を叩くスカカカという音が射撃音のように連続し、寸分違わず同じ形・大きさに切り揃えられたナスやサツマイモたちが吸い込まれるように隣の鍋に滑りこんでいく。さすがにこんな神業はユーキャンでも教えてくれない。英霊ランスロットがその肉体に染み付くほどに修練を極め、固有スキルにまで昇華された『無窮の武練』による恩恵だ。まあ、まさかランスロットも野菜を切るために使われるとは夢にも思っていなかっただろうが。

(この手応えからするに、俺でも『無窮の武練』は使えるな。これで戦闘は心配いらないわけだ。『騎士は徒手にて死せず(ナイト・オブ・オーナー)』もあるし)

大量の野菜をもの数秒で片付け、次に鶏肉の下ごしらえにとりかかりながら手に持つ包丁を眺める。肉切り包丁は葉脈のような黒い筋が血管のように表面に浮かび、墨汁に漬けたように黒く染まっている。切れ味も恐ろしいくらいに上がっているが、同じく俺が触れているまな板も宝具化しているので傷ついたり割れることはない。手にしたモノをなんであれ己の宝具とするスキル『騎士は徒手にて死せず(ナイト・オブ・オーナー)』も、中身が俺になっても引き継がれている。まさかランスロットも包丁とまな板を(r y

さて、戦闘に支障がないとすれば、問題はどいつとどの順番で戦い、勝利するかだ。第四次聖杯戦争のサーヴァントは強者揃いだからなかなか悩ましい。

セイバーはアーサー・ペンドラゴン。切り札は『エクスカリバ約束された勝利の剣』<sup>1</sup>

ライダーはイスカンダル。切り札は『アイオニオン・ヘタイロイ王の軍勢』

アーチャーはギルガメッシュ。切り札は『エヌマエリシュ天地乖離す開闢の星』

ランサーはデイルムツド・オディナ。切り札は『ガイ・ジャルグ破魔の紅薔薇』と『ガイ・ボウ必滅の黄薔薇』。

キャスターはジル・ド・レエ。切り札(?)は『ブレラィティーズ・スベルブック螺湮城教本』。

アサシンはハサン・サツバーハ。切り札(?)は『ザバーニヤ妄想幻像』。

特にこのメンツの中でもギルガメッシュは規格外で、3つの令呪全ての補助を受けたライダーのEX宝具を跳ね除け、その後すぐさまセイバーに挑まれてなお余裕を崩さないというチートっぷりだった。こいつを倒すには俺一人じゃ無理だ。他人の宝具を自分のものに出来る俺は上手く立ち回れるだろうが、物量で来られるとジリ貧だ。複数のサーヴァントを同時にぶつけて弱らせた後で挑むか、誰かと協力して一気に畳み掛けるしかないだろう。

だが、俺が一番厄介に思っているのはギルガメッシュではなく、

(ランサーをどうすつか、だな)

鍋をかき混ぜながら、ぐるると低く嘆息する。ランサーのガイ・ジヤルグは触れたものの魔力を消失させる能力を持っている。俺のナイト・オブ・オーナーとの相性は最悪だ。バーサーカークラスという縛りのためにランスロット固有の宝具『アロンドライト無毀なる湖光』が使えな

い以上、その辺のモノを宝具化して武器にするしかないのだが、ランサーの前では無力化されてしまう。Fate/ZERO解説本でも「バーサーカーにとってランサーは天敵」と記されていたし、こいつがいる限りはギルガメッシュにすら辿りつけないのだ。聖杯を手に入れるためにも、まずはランサーの打倒を優先して　　って、待てよ？

(しまった！！聖杯使えないんだった！！)

ガン！と頭を抱えてその場に蹲る。禍々しい黒騎士が床で丸まって苦悩する様は傍から見たらかなりシユールかもしれない。

そう、聖杯は第三次聖杯戦争の際のアリマユによる汚染によって悪しき願望機に変質してしまっているのだ。従って、「桜を助けろ」という願いも負の方向に曲解され、不幸な結果になる可能性が高い。どんな清廉な願いも、『この世の全ての悪』というフィルターを通せば全て破壊的な思惟を含んだものにされて叶えられてしまう。これは参ったぞ。雁夜おじさんは聖杯が役立たずだとは知らないし、言葉も話せない俺が聖杯に頼るなど説得できるはずもない。出来た所でなんでサーヴァントがそんなこと知ってるのかと訝しまれるだけだ。元より、聖杯以外に残り時間の少ない桜の命を助ける方法が现阶段では何も思いつかない。八方塞がりだ。桜を助けて、雁夜おじさんを幸せにするためにはどうすればいいのやら……。

ぐつぐつぐつ

鍋が激しく沸騰する音がヘルメット越しに鼓膜に滑りこみ、慌てて立ち上がる。強火のまま沸騰させすぎると野菜が崩れてしまう。弱火にして形を保たなくては、せつかくの栄養が溶けてしまう。せめて二人には美味しい飯を食って元気な姿を見せてもらいたい。

菜箸で野菜の硬さ加減をチェックしようとして　　唐突に、良い

案を思いついた。

（そうだ、この手があった！これなら、聖杯に頼らなくても二人の命を救えるかもしれん！）

そうと決めればさっそく料理に励まなくてはと、バーサーカーはエプロンを締め直すと嬉々として腕を振るった。やはりひどくシュールな光景だった。

±雁夜おじさんサイド±

「あの馬鹿には一度キツク言っておかないとな」

復活した雁夜が廊下をのしのと大股で歩いていた。その元気な足取りには先日までの刻印蟲による衰弱は見られない。固形物が喉を通らず、流動食やブドウ糖の摂取しかできなくなっていた状態が嘘のようだ。雁夜本人にも回復の理由はわからなかったが、深く考えてもいなかった。今はバーサーカーにどう説教をしてやるうかという考えで頭がいっぱいだったからだ。

（バーサーカーにはサーヴァントとしての自覚が足りない！一体全体、元はどんな英霊だったんだ！？）

プンスカと頭から湯気が出そうなほどに憤慨する。バーサーカーからは緊張感というものが感じられない。戦争中に平気で買物に行くなんてどうかしている。本当に戦えるのかすら疑問に思ってきた。

「ん？なんだか良い匂いがするな。こっちか？」

不意に、何か煮える良い匂いが漂ってきた。香辛料とハーブが鼻奥をツンと心地よく刺激する、食欲をそそる香り。魔術のせいで半ば麻痺した嗅覚でもわかる手料理の温もりと優しさに思わず立ち止まり、雁夜は出所までフラフラと引き寄せられる。行き着いた先は厨房だった。かつて、まだ雁夜たちの母親が生きていた頃、愛情を料理に変えて与えてくれたことがあった。例え陰惨な血筋に生まれながらも、そこには純粋な子どもへの慈しみがあつた。知らず潤んだ目をこすってドアを開ければ、そこには優しい母の背中ではなく、

「やっぱりお前か」

「うう？」

屈強な鎧騎士の背中がキッチンを支配していた。天井を突かんばかりの長身が雁夜に気付いて振りかえる。表情の見えぬ目庇の奥の瞳が「元氣そうじゃないか」と朗らかに笑った気がした。雁夜はその優しさに怒る気力を削がれかけたが、これからのことを考えてしっかりと戒めておくことにした。

「おいバーサーカー！お前が見た目と違って温和なことはよくわかったが、もっとサーヴァントらしく緊張感を持って……………」

語尾に至るに連れて小さくなってゆく。眉根を寄せる雁夜の視線の先には、鍋があつた。漆黒に艶めき、鍋とは思えない存在感と迫力を放つ鍋が。表面に走る血脈のような筋はバーサーカーの手から伸びている。雁夜はマスターに与えられるステータス透視能力によって、その力の本質を見ることが出来た。

（バーサーカーが手にしたモノは、なんであれバーサーカーの宝具

になるのか！)

あらゆるモノを己の武器に変えて戦える。この街にありふれる全てのモノがバーサーカーの手札となる。それは無尽蔵の宝具を所有しているに等しい。雁夜は改めて、自分の召喚したサーヴァントが得難い強力な強者であることを思い知った。

先ほどまでバーサーカーの力量を疑っていた自分が恥ずかしい。彼と一緒にいれば間違いなく、この戦争で優勢に立ちまわることが出来る。

「凄い！これなら、きっと聖杯を手に入れることが　その小鉢はなんだ、バーサーカー」

勝利を確信して興奮する雁夜に、バーサーカーが黒い鍋の中でポコポコと沸騰する緑色の何かを小鉢に掬い、ガシヤガシヤと鎧を鳴らしながら近づいてくる。スープ状のそれが小鉢の中でドロドロと揺れる。

「味見しろとも言うのか！？明らかに怪しいだろそれ！自分ですればいいじゃないか！？」

「ううう」

「ヘルメットがあつて出来ない！？脱げばいいだろうが！うわ近づけるな顎を掴むな無理やり飲ませるなやめるおおおおおおおおおお！」

……

……

：

「美味しいね、このグリーンカレー。ね、雁夜おじさん」

「ああ、美味しい。腹立たしいくらい美味しい」

カレーだった。普通のカレーではなく、ハーブを用いたグリーンカレーだ。ご丁寧に具は全て細かく切られていて、病人の俺たちにも食べやすいように配慮がなされている。特に固形物を食べるのが困難だった俺はあまり噛まなくてもいい料理はとても嬉しい。今朝のおかゆ然り、バーサーカーは俺の体調を詳しく把握しているらしい。サーヴァントにはマスターの健康状態も伝わるのだろうか。

「うーん？」

「うん、すつごく美味しいよ、バーサーカー。すぐに元気になれそう」

桜の言うとおり、味は絶品だ。そこらの店で二束三文で食べられるようなものじゃない。香辛料とココナッツミルクが奏でる爽やかな辛さが味覚を様々な角度から刺激し、脳を喜ばせる。何度口に運んでも一向に飽きが来ない。さらに、ただ単に舌を楽しませるだけに留まらず、栄養もたっぷりと入っている。不足していた滋養が片っ端から満たされていくのがわかる。例えるならば、餓死寸前に食べた一切れのチョコレートのような、活力が身体の中から末端までじんわりと広がってゆく充足感だろうか。それを噛み締めるたびに感じる。心の底から食べてくれる人間のことを思っ作られたものだということがよくわかる。本当に美味しい。こんなに心のこもった料理は久しぶりに食べた。

思わず視界がゆらゆらと水面のように揺らめく。

「雁夜おじさん、泣いてるの？どこか痛いのか？」



「だ、大丈夫だよ、桜ちゃん。ちょっと、辛さが目に染みちゃって  
はは、情けないね」

「ぐるる〜m9(^( ^)」

「お前は黙ってる!」

「ぐるる(、・、)……っご?」

しよげるバーサーカーの腕に、小さな手が触れた。桜がおずおずと  
バーサーカーの手を握る。その頬は桜色に火照っている。

「あ、あのね?私、バーサーカーくらい料理が上手になりたいの。  
そしたら、そしたら……」

俯き、もじもじと身を擦らせる少女。雁夜は激しく嫌な予感を感じ  
た。

「バーサーカーのお嫁さんにしてくれる!？」

「なん…だと…!？」

その時、雁夜に電流走る。

「ダメです!絶対ダメ!」

「おじさん、愛には歳の差なんて関係ないんだよ?」

「歳の差以前の問題です!どこで覚えたのそんな台詞!？」

「お姉ちゃん」

「おいしいいいいい!!なに教えてんの凜ちゃんんん!!ほら、  
バーサーカーも何か言っちゃれ!!」

「ぐるる(\*、\*）」

「照れてるんじゃないっ!」

照れくさそうに後ろ頭を掻くバーサーカーを叱責しながら、しかし、

雁夜は暖かな満足感を感じていた。親しみと信頼があればこそ不快でない怒り。こんな感情を抱いたのはいつた何時ぶりだろうか。バーサーカーに怒る雁夜を見て、桜がクスクスと笑う。釣られて雁夜も笑ってしまう。それはまるで普通の家族の食事風景のようだった。雁夜が喉から手が出るほど欲し、決して手に入れることが許されなかったささやかな日常が、そこにあった。それをもたらしたのが人外の亡霊であっても、雁夜は嬉しかった。

「……………ありがとな、バーサーカー」

小声で告げた感謝の言葉に、バーサーカーは小さく親指を立てて応えた。彼とは良い友人になれそうだ。

「バーサーカーのご飯のおかげでだいぶ楽になったよ。栄養士の資格とか持ってるの？」

「ぐるる（肯定）」

「……………冗談だよな？」

……………

……………

…

「行くのか、バーサーカー」

深夜。

雁夜の緊張を孕んだ問いに、バーサーカーが静かに頷く。全身から

放たれる気迫は彼の戦意の充溢に他ならない。  
街中に散開させた使い魔の情報で、港湾区画の倉庫街でサーヴァン  
ト三体が睨み合いをしていることがわかった。セイバー、ランサー、  
ライダーの三体だ。特にセイバーは最優のサーヴァントと称され、  
聖杯を求めるにあたっては必ず倒さねばならない障害となる。先の  
ランサーとの戦いで消耗している今がセイバーを倒す好機かも知れ  
ない。

(何より、俺たちには時間がない)

傍で寝息を立てる桜の髪を撫でる。滑らかだった髪質は今や針金の  
ように固く、見る影もない。脱落者が出るのを待っている間にも桜  
の容態は刻々と悪化していく。漁夫の利を狙う余裕はない。一刻も  
早く聖杯を手に入れる必要がある。そのためには、こちらから積極  
的に動くしかない。

「バーサーカー、俺は桜の元から離れられない。臓硯も兄貴もいな  
い今、この家は無防備だ。桜を残してはいけない。お前一人を戦わ  
せることは忍びないが」

「ぐるるっ」

「お前……」

申し訳なさそうな雁夜の台詞をバーサーカーは手で制した。燃える  
双眸が「何も言うな、わかってる」と言っている。

(いいだろう。もはや何も言うまい。俺はお前に全てを託す)

俺の決意を確認したバーサーカーが踵を返す。踏み出した脚が黒い  
霧となり、霊体化していく。彼はこれから戦地に赴く。俺の願いを  
叶えるために。桜の命を救うために。

「頼んだぞ。……明日の朝食、俺も桜も楽しみにしてるからな」

実体化が解ける寸前、バーサーカーが首だけでこちらを振り返る。ヘルメットの下の容貌が、ニヤリと不敵な笑みを浮かべた気がした。大丈夫だ、彼ならきつと、勝利を掴める。俺が魔力切れを起こさなければ、彼は全力で戦える。彼の足を引っ張らないためにも俺も死力を尽くさなければならぬ。

バーサーカーの気配が消えると、俺はすぐに使い魔の蟲たち全てを家中にスタンバイさせる。侵入者があればこいつらが対処する。バーサーカーが戻るまでの時間稼ぎくらいは出来るだろう。

よし、と覚悟を決めると、ベッドの傍の椅子に座って精神を集中させる。肉体深くまで寄生した無数の刻印蟲に意識を繋げ、活動を活性化させる。途端、指令を与えられた蟲たちが俺の体力と生命力を蝕み、それを対価にして魔力を生成していく。それが伴う激痛は想像を遥かに超える。

「がっ、うぐっ！……こんなものじゃダメだ！もっと、もっと魔力を送らなければ……！！」

勝機を増やすために、バーサーカーに送る魔力を少しでも多くするためにも、これ以上の激痛に堪えなければならぬ。肉を削ぎ落とされ、剥き出しにされた骨に塩を擦りつけられているような、精神をゴリゴリと削る圧倒的な激痛の奔流が絶えず雁夜を襲う。血涙が頬を流れ、口端から血の泡が吹きこぼれる。身体中が細かく痙攣し、手足の感覚が死に引きずられるように失せていく。

「……………と……………さん……………」

「……………！？」

ともすれば飲み込まれそうな意識の中、暖かな感触を太ももに感じた。赤く濁った目で見やれば、寝ぼけた桜の手が雁夜の足にそっと触れていた。

「お父さん……」

「……」

眼光が輝き、腹腔で熱が灯るのを知覚する。五臓六腑から力が湧き拡がって消えかけていた手足の感覚を取り戻す。気力を振り絞って意識を奮い起こした雁夜の口元が、不敵な笑みを浮かべた。大丈夫だ。この娘のためなら、どんな痛みにも堪えられる。

口元の血を袖で拭い、雁夜は再び精神を集中させる。視界がバーサーカーと繋がる。眼前には、三体のサーヴァントと、いつの間にか現れていたアーチャーの姿があった。その場にいた全員の視線がこちらに集中する。どいつもこいつも強そうだ。選り取り見取りじゃないか。

(さあ　　始めよう、バーサーカー!!)

1 - 3 健康は毎日の食事から(後書き)

雁夜おじさんも桜も生かす方法は、感想コメントから思い浮かびました。感謝ですm( )m

#### 1 - 4 ケイネス先生の中の人ひとりっぴいと同じ（前書き）

僕もヴァレンシュタイン元帥とかテレゼ皇女様の下で艦隊率いて戦いたいなあ。

そうそう、コメントでたくさんのご指摘を頂きました。バーサーカーの能力とか宝具とか制限とか色々と間違ってるみたいです。……小まげえことはいいんだよ！！（A A 略

これはある男の夢の話なので、ちよつとした違いもあるのです。そういうことにしてくださいませ！ノリと勢い！それが一番大事！

時系列では1 - 2の続きになります。

#### 1-4 ケイネス先生の中の人ひとりっぽいと同じ

「ケイネス先生サイド」

「Tairamuneee!!」

「くつ!?き、貴様、いい加減にッ……!!」

「Naitititititiiii!!」

「ぐあああ ツ!!」

「これは、いい展開だな」

セイバーにバーサーカーが襲いかかる様子を隠れ見ながら、ランサーのマスター、ケイネス・エルメロイ・アーチボルトはあからさまにほくそ笑んだ。

先ほど現れたアーチャーの恐るべき宝具群にはさすがに身が竦んだが、おそらくは宝具の全体が露見することを恐れたそのマスターによってアーチャーは撤退した。さて残った四体の睨み合いをどのようによりに進めるべきかとケイネスが思考を巡らせ始めるのとバーサーカーがセイバーに斬りかかったのはまったくの同時だった。

バーサーカーとは思えない洗練された斬撃に、最優のセイバーが押し返されている（何やら珍妙な雄叫びが聞こえた気がしたが、聞き間違いに違いない。狂戦士が「貧乳!」などと叫ぶはずがない）。ゲイ・ボウによって治癒不可能の傷を負ったセイバーは手負いの獲物と化した。そこへ理性を失った狂戦士が襲いかかっているとあらば、この機を利用するのが巧者の選択だ。

この戦争において強力な競争相手になると思われたセイバーをアーチボルトに匹敵する血統、アインツベルンを簡単に脱落させ



ることが出来うる状況に、ケイネスの口端が自然と持ち上がる。

だが、その目論見はよりにもよって己のサーヴァントによって覆される。

鼓膜を切り裂く衝突音を響かせ、ランサーがバーサーカーの刀剣を華麗な槍捌きでもって跳ね除けたのだ。

「悪ふざけはその程度にしておうか、バーサーカー。そのセイバーには、この俺との先約があつてな。これ以上つまらん茶々を入れるつもりなら、俺とて黙ってはおらんぞ？」

「ランサー……」

好敵手と認めた相手には最大の敬意を払う。美しい青年騎士はまさに伝承通りの高潔さに満ち溢れていた。その騎士道精神を前にして、ケイネスは舌打ちをして「愚か者め」と奥歯を噛み締める。

ランサー……かつて主の妻を寝取り、裏切り、同胞を尽く殺した篡奪の騎士、デイルムッド・オディナのことを元から信用していなかったケイネスは、ランサーに全幅の信頼を置いているわけではなかった。いわんや、彼の掲げる騎士道や忠義にも懐疑心を抱いていた。

（使い魔風情が、騎士道などと身分不相応なものを掲げおつて）

苛立ちを胸に左手の令呪を見る。初戦で切り札を使う羽目になってしまうのは些か不本意ではあるが、これからの戦争をより有利に進められるのならば安いものだ。一秒にも満たない時間でそう決断すると、声帯に指先をあてがい、次に眼前で空に魔方陣を描いて声の拡散と幻覚処置を行う。幾重もの隠蔽魔術を維持してなお自由に魔術が使えるのは、サーヴァントへの魔力供給を妻に担ってもらった結果である。

『何をしている、ランサー？セイバーを倒すなら、今こそが好機である』

「……っ！ セイバーは、必ずやこのデイルムツド・オディナが誇りに賭けて討ち果たします！何となれば、そこな狂犬めも先に仕留めてご覧に入れましょう。故にどうか、我が主よ！この私とセイバーとの決着だけは尋常に……！」

『ならぬ。ランサー、バーサーカーを援護してセイバーを殺せ。令呪をもって命ずる』

（誇りだと？それこそ、使い魔にはもつとも相応しくないものだ）

ふん、と冷たく鼻を鳴らすケイネスの左手から令呪の一角が透けるように消えてゆく。これで、ランサーは馬鹿げた騎士ごっこをやめてケイネスに忠実な使い魔となった。視力強化の魔術でランサーのご立派な美貌に注目すれば、いかにも無念そうな顔を浮かべながらも槍の英霊の名に恥じない槍技を行使してセイバーに襲いかかる。最初からそうしていれば令呪を使う必要もなかったのだ。つまらない意地を張るから結局、主人の手を煩わせることになる。ランサーの語る騎士道などとはしよせんその程度であり、極論すればただの自己満足、自慰行為でしかないのだ。

じりじりとセイバーとの距離を詰めるランサーの隣に、バーサーカーが並び立つ。狂戦士の攻撃対象がランサーに移ることを警戒していたが、やはりセイバー以外には見向きもしない。尋常の思考が当て嵌まらないのは、さすがバーサーカーと言ったところか。あれのマスターはきつと持て余しているに違いない。

狂犬と呼び捨てた者と剣の向きを揃えることになったランサーの表情がさらに険しくなるのを観察しながら、ケイネスは身の内で恍惚が膨れ上がるのを感じた。妻、ソラウがランサーに向ける恋慕の眼差しに薄々感づいていたケイネスは、ランサーが屈辱に歯噛みする様を見ることで気を紛らわせていた。

「……アイリスフィール、この場は私が食い止めます。その隙に、せめて貴女だけでも離脱して下さい。出来る限り遠くまで」

セイバーの言葉は淡々としていて、しかし自分たちが極めて切迫した状況にあると自覚している証だった。聴覚強化と集音の魔術でその台詞を耳にしたケイネスは勝利を確信する。

（殺せ！）

ケイネスの内心の叫びに反応したかのように、ランサーとバーサーカーが同時に地を蹴る。

ランサーの双槍が刺突の構えでセイバーに向かって突き出され、バーサーカーの剣の切っ先がこちらに向かって振り上げられ、

「え？」

次の瞬間、視界を潰す閃光。鼓膜を遮る爆音。総身を震わす激震。崩れ落ちる足場。落下してゆく浮遊感。身を押し潰してくる冷たい鉄骨。肉が張り裂ける痛み。

（そうか、バーサーカーは最初から　　）

そこで、ケイネスの意識は途絶えた。

キウエイバーサイド

「……………なんだあ？」

ライダーの呆けた声にその場にいた全員がハツとさせられる。つい今しがたまで絶体絶命の状況に陥っていたセイバーも、彼女を仕留めようとしていたランサーも、ぽかんと口を開いてただ一点を見つめている。それも無理はないと思う。

全員の視線が集まる先　　バーサーカーが、突如身を180度反転させ、何を思ったか持っていた剣をセイバーとは真逆の見当外れな方向にぶん投げたからだ。

元はアーチャーの宝具だった剣は300ヤードほど離れた倉庫の一角に着弾し、直後、雷鳴に似た爆音と閃光を鳴り響かせた。直撃を受けた倉庫が音を立てて崩れ落ち、土煙を激しく舞わせる。バーサーカーの行動を理解できず、誰も口を開かない。そもそも理性を失った者の行動に理由を求めること自体が間違っているのかもしれない。狂戦士の狂戦士たる由縁を見せつけられ、誰もが呆気に取られる中、一人が悲鳴じみた声を上げる。

「ケイネス殿ッ!?!」

ランサーの叫びだった。崩壊する倉庫を睽目して見つめる焦燥の顔で、ようやく察する。バーサーカーが宝具を投げた先に、ランサーのマスターがいたことを。

「バーサーカー、貴様ッ！　　なっ!?!」

「な、何してんだアイツ!?!」

思わずウェイバーも驚愕の声を上げる。主君を害した敵に憤怒の形相を向けたランサーの前で、バーサーカーが呆気なく構えを解いた

のだ。片手に保持したままのアーチャーの短刀が降ろされる。今までのセイバーに対する雄叫びや苛烈な攻撃が嘘のように静まったその姿は、誰構わず喰らいつく狂犬というより、主人の命令に忠実な“闘犬”を連想させた。

「なるほどな。そういうことか」

頭の上から降ってきた一人で納得していやがるライダーの声に、説明と抗議の視線を発射する。精一杯の嫌味を込めた視線を難なく受け止めたライダーがさも愉快そうに破顔し、答える。

「わからんか、坊主。あ奴の狙いは最初からランサーのマスターだったのだ。ランサーがセイバーに釘付けにされ、マスターがもっとも無防備になつた瞬間を突いたのだ」

「な、なに言ってるんだよ！バーサーカーにそんな器用な真似が出来るはずないじゃないか!？」

バーサーカークラスの特徴は、その名の通り“狂っていること”だ。理性がないのだから、戦術もクソもない。偶然の可能性の方が高いんじゃないのか？

そんなウェイバーの反論に、ライダーは「その通り、バーサーカーには出来ん」と頷く。

「ならば、仕組んだのはあ奴のマスターということになる」

「マスター……」

ここに来てようやく、ウェイバーは事態を把握するに至った。バーサーカーがセイバーに突然襲いかかったように見えたのは、ランサー陣営を油断させるためにバーサーカーのマスターが張った罠だったのだ。攻撃を仕掛ける時ほど人間は無防備になる。ケイネスも同

様であり、最強の武器であり防具でもあるサーヴァントをセイバーに向けた無防備な瞬間を狙い、バーサーカーに攻撃させたのだ。

（だけど、これはケイネスの魔術迷彩を完全に看破してないと出来ない作戦じゃないか！バーサーカーのマスターの魔術師としての腕はケイネスを超えるのか！？）

ケイネスの才覚はウェイバーもよく知っている。世界に名だたる時計塔の講師は伊達ではなく、間違いなく現代でトップクラスの魔術師だ。陰湿な性格は用心深さの裏返しでもあり、こと己の身を守るための魔術迷彩に手を抜くことなど有り得ない。念には念を入れた巧妙な隠蔽魔術を幾重にも身に纏っていたはずだ。ウェイバーが10年間かけても見破ることが出来ないだろう隠蔽魔術を、バーサーカーのマスターは瞬時に看破し、それすら利用した戦術を構築し、実行したのだ。

超えるべき大きな壁だと思っていたケイネスを難なく脱落させた未だ見ぬ強敵の出現に身を震わせるウェイバーに、ライダーは笑いかける。

「それに見てみる、坊主。あの暴れ馬の手綱も見事に握っておる。あ奴のマスターは獣の躰に関しても上等のようだ」

その言葉にバーサーカーを凝視すれば、ランサーの槍の間合いにいるにも関わらず微動だにもしていない。まるで「待て」と命じられた軍用犬のようだ。バーサーカーは特に扱いが難しいクラスとして知られる。操るには相応の魔力と精神力が必要とされるが、今回のバーサーカーのマスターにはその両方が備わっているらしい。魔術師としての才、マスターとしての才。自分が十全に持っているとは言えないそれらを完璧に併せ持つ強敵が、どこかからこの戦場を見下ろしている。遙か高みから値踏みをされているような錯覚に、ウ

エイバーはゴクリと喉を鳴らす。

(…………?)

鳴らして、決して凡愚ではないウェイバーは目の前の違和感に気付いた。

「お、おのれっ…………！」

ランサーが、動かないのだ。殺意に満ちた眼差しと槍先をバーサーカーに向けてはいても、切っ先がバーサーカーに突き刺さることはない。それどころかケイネスを助けにも行かない。現世との楔の役割を担うマスターを失えば、サーヴァントは現界し続けることができな。サーヴァントにとってもマスターの存在は必要不可欠だ。だというのに、ランサーは何かの圧力に抗うかのようにその場でただ身体を震わせるだけだ。騎士道を重んじるこのランサーが、主を助けもせず、主の仇も討とうとしないのはどうということなのか？

(そうか、令呪か！)

先ほどケイネスが令呪によって行った命令 『セイバーを殺せ』が、皮肉にもランサーの動きを制限しているのだ。今のランサーは、マスターから別の命令がなければセイバーのみを殺すという行動しか出来ない。だから、目の前のバーサーカーに斬りつけることもできない。

「でも、それならどうして、今の内にバーサーカーをセイバーにぶつけないんだ…………？ランサーに令呪がかけられている今なら共闘でセイバーを倒せる。ケイネスが死んでいればランサーも自動的に消えることになるし、漁夫の利じゃないか」

「それはな、坊主。バーサーカーのマスターが戦場の華の愛で方を心得た粹な奴ということか、それとも」

知らずに漏れたウェイバーの呟きに応えたライダーの目が、すつと細められる。

「セイバーを温存させる方がこれからの展開に都合が良いと踏んだか、だな」

「……!!」

最優のセイバーを残しておけば勝手にライバルを減らしてくれる。あの強大なアーチャーに手傷でも負わせてくれれば、バーサーカーの勝機も増える。アーチャーに対して有利に立ち回っていたバーサーカーなら、相手が弱つていれば勝てるかもしれない。だから、敢えてセイバーを脱落させなかった……。

先ほどまでの自分なら偶然だと一笑に付したかもしれないが、今はそんなことは出来ない。自分の才能を周囲より高く評価する傾向のあるウェイバーだが、今は見えない敵が張り巡らす老獪な知略を理解するので精一杯だった。

「一つ確かだと言えることは、少なくとも一騎のサーヴァントが、ここで脱落するということだろう。」

「ランサー!？」

「くっ……!!」

セイバーがぎょつとした顔でランサーを睽目し、ランサーも己の身体を見下ろして歯噛みする。おそらく、近距離にいるセイバーは気付いたのだろう。ランサーの血肉を形作る魔力が激減し始めていることを。現世との繋がりが見切れた結果だ。やはり、ケイネスは先の攻撃で命を落としたのだ。ギリ、と奥歯を噛み締めてランサーが今



一度バーサーカーを睨みつける。相変わらず、バーサーカーはじつと佇んだままだ。

バーサーカーに動く気配がないことを認めたランサーが、踵を返してセイバーと正体する。

「セイバー、もはや俺に時間は残されていない。聖杯を献上できなかった、御守できなかった、仇を討てなかった。このままでは我が主にあまりに面目が立たない。せめて、主が望まれたお前の首級は取らせてもらう。狂犬にお膳立てされたことは気に食わないが、付き合ってもらおうぞ」

セイバーもバーサーカーに苦い一瞥を送る。彼女もバーサーカー陣営に謀られたことに気付いたのだろう。不本意な死合いに納得しかねる表情をチラと垣間見せ、すぐにそれを消して好敵手の決死の申し出に剣を構えて応える。

「……いいだろう。私も些か不満は残るが、あなたとは決着をつけておきたい。行くぞ、ランサー！」

「感謝するぞ、セイバー。いざ、参るッ!!」

声高らかに言い放つと、セイバーとランサーが同時に地を蹴る。7ヤードの距離を一瞬で0にして、両者が必殺の一撃を放つ。大上段に振り上げられた不可視の剣と矢のように引き絞られた双槍が、すれ違いざまに火花を散らせながら互いの急所を狙う。

二騎の交差は一瞬で、ただ一度だけだった。

「見事だ、セイバー」

果たして、膝をついたのはランサーだった。胸に真一文字に走る傷は見た目にも致命傷で、だというのにその顔には自嘲とも清々しさ

とも取れる笑みが浮かんでいる。

マスターを失ったことよって現世から切り離される寸前のランサーは、もはや令呪という補助動力で動いているようなものだ。そして、セイバーは補助のみで勝てる相手ではなかった。

背後のランサーに対し、セイバーは振り返らずに背中中で応える。その凜とした後ろ姿に、ウェイバーの頭を“王の背中”という言葉が過ぎる。

「此度の貴方との手合わせは心躍るものだった。出来るならば、再び剣を交えたい。真の決着はその時につけよう。また会おう、サー・デイルムツド」

「ああ、また会おう。騎士王」

サー・デイルムツドと呼ばれた男は、最期に静かに目を閉じるとやがて音もなく消え失せた。敗北したというのにどこか満足気な微笑を浮かべていた彼は、もしかしたら仕えたい主を見つけたのかもしれない。

そんな救われたような表情で去ったランサーとは対照的に、セイバーの表情は今も険しいままだ。なぜなら彼女のすぐ正面に、ランサーが倒れるように仕向けた者　バーサーカーがいるからだ。ギリ、とセイバーの剣を握る両手に力が漲る。それはランサーとの戦いで受けた傷が回復したことを意味する。今なら彼女は全力でバーサーカーと戦える。対するバーサーカーの得物はアーチャーの短刀のみ。

（さあ、どう出るんだ？バーサーカーのマスター！）

ウェイバーはバーサーカーを介して戦場を差配しているであろう敵のマスターの思考を読み取るのと戦車から身を乗り出して刮目する。行動を注視し、パターンを分析し、対策をとれば、如何なる相手で

も恐れることはない。セイバーとの戦いを見て何か掴めれば、バーサーカーの対処法も自ずと見えてくる。

しかし、相手はやはり一筋縄では行かなかった。

「貴様、逃げるかッ！」

「ほお。引き際も心得てるとは、なかなかどうして、敵であることが惜しい奴よ」

敵前逃亡に吠えるセイバーの眼前で、バーサーカーが黒い霧と化して掻き消えてゆく。まるでランサーの死に様を看取ったかのように、敵かにこの場を去る姿に、ライダーが感嘆の声を上げる。一方、ウェイバーは尻尾も掴ませない敵の周到さに齒噛みしていた。

（せめて、バーサーカーの宝具のヒントだけでも掴みたかった）

セイバーもアーチャーも切り札の宝具を垣間見せ、ライダーに至っては真名を晒してくれやがった。一方、バーサーカーは飛来する武器を掴みとって戦えるほどの類稀なる戦闘技術を有するということ以外には何の手の内も見せていない。戦闘で消費した魔力も一番低いだろう。さらに、バーサーカーの手にはアーチャーから奪った宝具が握られたままだ。まさに一人勝ち状態だ。初戦で勝利したのはセイバー陣営だが、制していたのはバーサーカー陣営だと言っても過言ではない。

「……a<sup>ア</sup>er……」

消える直前、バーサーカーが掠れ切った声で呻く。今度は何を言うのかとセイバーが身構え、

「ahogge」

「き、貴様ツ！？これはアホ毛などではないぞ！こら逃げるな待て！」

顔を真っ赤にしたセイバーがぶんぶんと不可視の剣を振り回すが、時すでにお寿司。イカスミのような黒い霧は闇に溶け、バーサーカーの気配も完全に失せた後だった。それでもセイバーは頭上のアホ毛を左右に揺らしながらバーサーカーがいた空間をメッタ斬りにする。

「貧乳やらナイチチやら、私を馬鹿にしているのか！バーサーカーのくせに私を罵倒する時だけはハッキリ喋るとはどういうことだ！だいたい大きな胸の何が良いのだ！あんなものただの飾りだ！」

「セイバー、落ち着いて！大丈夫、どんな胸にも需要はあるから！」  
「アイリスフィール、それはフォローになっていない！」

「ぶはははは！たしかに王のくせに貧相な乳をしているな！」  
「き、貴様　　！！！」

セイバーを落ち着かせようとして逆に火に油を注ぐマスターと、それを指さしてゲラゲラヒーヒーと腹を抱えて笑い出すライダー。とても戦争中には見えない珍妙な光景を前に、ウェイバーは大きなため息をついて夜空を見上げ、呟く。

「聖杯戦争つて、こんなノリでいいのかなあ？」

多分よくない。

キ切嗣サイドキ

「……無事か、舞弥」

物陰にじつと身を伏せていた切嗣が押し殺して声でインカムの向こうにいる舞弥を呼ぶ。返答を待つ間、切嗣はつい先ほど起きた衝撃的な出来事を顧みる。

セイバーの劣勢を覆そうと、ランサーのマスター　　ケイネスの狙撃を決意し、引き金に力を込めた瞬間、スコープの中のケイネスが爆発に飲み込まれて掻き消えたのだ。あれほどの爆発と倒壊だ。死んだに違いない。そしてその原因を探ると、なんとバーサーカーによるものだということがわかった。それを理解した瞬間、切嗣と舞弥は慌ててその場を離れ、物陰に身を隠して息を殺し、五感を総動員して周囲を警戒した。あれほど隠蔽魔術を駆使して身を隠していたケイネスですら補足されたのだから、当然、自分たちの位置も見抜いたのではないかと。

「舞弥？返事を」

『こちらは、問題ありません。ランサーは脱落、バーサーカーもすでに撤退したようです』

窮屈そうな声で、舞弥が返事をした。どこか狭所に隠れて戦場を監視しているらしい。お互い無事なところを見ると、自分たちは見つからなかったらしい。

（もしくは、見逃されたか）

後者の可能性を考えて知らずにゴクリと唾を嚥下した切嗣が、戦場の様子を確認するために再び狙撃位置まで戻り、銃のスコープを覗く。

そこには、なぜか大爆笑しながら戦車を駆って空へ逃げてゆくライダーたちと、彼らに向かって風の斬撃を飛ばしまくる怒り顔のセイ

バーが映っていた。

「……状況はさっぱりよくわからないが、僕たちは動いてもよさそう。舞弥、念のためにサブの合流地点で会おう。調べ直さないといけないことが出てきた」

『バーサーカーのマスター……間桐雁夜、ですね』

「ああ、そうだ。付け焼刃の魔術師だと甘く見ていたが、どうやら違うらしい」

一頻り今後の方針を伝えて通信を終えると、切嗣は手早く狙撃銃を分解してアルミケースに収納し、合流予定場所に向かう。

消去法で考えて、バーサーカーのマスターが間桐雁夜であろうことは予想がついていた。即席の魔術師ならば狂化スキルでステータスアップが出来るバーサーカーのクラスを選ぶことも想定内だ。だから、切嗣は間桐雁夜のことを“当主を継がなかった落伍者が戦争のために呼び戻されたに過ぎない”と判断していた。今、それが大きな間違いであったことに気づき、己の浅薄さを悔いている。ランサー陣営を容易に脱落させる実力、バーサーカーを完全に操る手腕、あえてセイバーを温存させる戦略構築……並大抵の人間に出来ることではない。

（当主を継がなかったのではない。敢えて家から離れることで注意を逸らし、この戦争のためにじつと修練を重ねてきたんだ。間桐の虎の子、というわけか。言峰綺礼という危険な奴がすでにいるのに、とんでもないダークホースが現れたな）

間桐邸を襲撃する強行案もあったが、相手がこちらより上手の可能性が出てきた以上、白紙に戻す他ない。自分から死地に飛び込むような真似は切嗣がもっとも嫌う愚行だ。より確実に倒せる方法を考えなくては。

切嗣の中で間桐雁夜という巨大な影が膨れ上がる。それが虚像であることを、切嗣は永遠に知ることはない。

「綺礼サイド」

「間桐雁夜、か」

「時臣師はバーサーカーのマスターと面識がおりなのですか？」

教会の一室。通信機から発せられた遠坂時臣の呟きに含む物を感じた綺礼は、それに敏感に反応した。“強敵”の情報は、少しでも多いほうがいい。

「いや。葵　妻の幼なじみだという話は聞いている。実際に目にしたことは数度だけで、会話もない。魔術を嫌って逃げ出した凡愚市井だと、その時は思ったものだったが」

「違った、ということですね」  
「ああ、そのようだ。どこが“急造の魔術師”なのやら。間桐の老人も意地の悪いことをする」

バーサーカー陣営の脅威度は、二人の予想を遥かに超えていた。全サーヴァント中最強と確信していたギルガメッシュに一步も引かず、宝具の発現まで追い込んだバーサーカー。そして、バーサーカーをまるで軍用犬のように御して見事に戦場を“演出”してみせたマスター。当初予想していたパワーバランスを大きく崩す敵の出現に、二人は戦略の見直しまで視野に入れ始めていた。

「アサシンを間桐邸に仕向けますか？マスターが外出したという報告はありません。バーサーカーが戻る前に殺すべきかと」

“兵は拙速を尊ぶ”ということは何より経験で理解している元代行者は障害の早急な排除を具申するが、通信機から返ってきた言葉は『いや、やめておこう』だった。

『間桐雁夜を侮るべきではない。あの老人の隠し玉だ。一筋縄では行かない相手だろう。撃退されてアサシンの存在が露見する危険もある』

「しかし……」

『心配せずとも、最強のサーヴァントが英雄王であらせられることに変わりはないさ。セイバーを敢えて残したお手並を拝見させて貰おうじゃないか』

「……はい」

“常に余裕をもって優雅たれ” 遠坂家に伝わる家訓らしい。死と隣り合わせの修羅場をくぐり抜けてきた綺礼とは無縁の規範だ。甚だ理解出来ないが、英雄王ギルガメッシュを有していれば余裕が生まれるのも仕方が無いのかもしれない。不安のため息を飲み下し、綺礼は時臣と今後の方針を確認しあう作業に集中した。

(後でマーボー食べに行こう)

あまり集中していなかった。

±雁夜おじさんサイド±

(ぐるぐる)

「も、戻った、のか。バーサーカー」



ランサーの消滅を見届けたバーサーカーが実体化を解くと同時に、雁夜の魔力負担は激減した。それに合わせ、雁夜の血肉を貪って魔力を生成していた蟲も活動を止める。しかし、そのダメージは甚大ではなく、雁夜は現在椅子に沈み込むようにもたれ掛かり、荒い息を吐いていた。指一本動かす力すら残されておらず、視線を動かすだけで精一杯だ。見れば、バーサーカーは霊体のまま雁夜の傍らに立っているようだった。雁夜へ負担をかけないように気遣っている。その配慮に苦笑する。

「大分、回復してきた。お前のカレーが効いたのかもな。だから、実体化してもいいぞ」

多少のやせ我慢はあるが、嘘でもない。事実、雁夜の体力回復速度は今までに比べて多少早くなっていった。カレーのおかげかは定かではないが、サーヴァントの実体化程度なら許容できるほどには回復した。それに、親しみの持てるバーサーカーには、なるべく実体化して傍にいて貰いたい。雁夜の笑みに余裕を感じ取ったらしいバーサーカーがすつつと湧き上がるように実体化する。

「ぐるる？」

「ああ、大丈夫だ。それより、お前　　アーチャーの宝具を奪って来たのか」

バーサーカーの左手に握られた短刀は、アーチャーとの攻防の最中に彼が奪い取ったものだ。黒い葉脈の侵食は、その宝具の所有権がバーサーカーに乗っ取られていることを示している。それを目に入れた雁夜の口端が卑屈に釣り上がる。

（ははは、奪った。奪ってやった。俺から全てを奪った遠坂時臣か

ら、奪ってやったんだ！)

憔悴しきっていた雁夜の顔に、鋭く暗い嘲笑が刻まれる。負の感情によって燃え上がった生命力が雁夜の口から乾いた笑い声となって吐き出される。

あれだけ圧倒的に見えた黄金のアーチャーを前に、バーサーカーは一步も引かなかった。代々血を重ねて磨きあげた遠坂の魔術に、急造の雁夜が互角に張り合った。それどころか撤退までさせ、あつという間にランサー陣営も脱落させた。バーサーカーを信じていたが、まさか彼にこれほどの戦いの才があるとは思わなかった。遠坂時臣は激しく狼狽したに違いない。今まで見下していた相手に良いように戦いを引っ掻き回され、あまつさえ手柄をとられたのだ。

(俺のバーサーカーから尻尾を巻いて逃げやがった。ざまあみるだ。バーサーカーがいれば、お前のような高慢ちきな奴など怖くない。俺はもう負け犬でも落伍者でもない。そうだ、バーサーカーがいれば、俺を見下していた連中を脅かし、恐怖させてやれる！)

心からの愉悦にくつくつと喉が鳴るのを自覚する。その瞳はじわりと淀み、汚れた情念に染まるうとしていた。

「時臣、貴様の吠え面を見たかったぜ、ははは　　うあだッ!？」

突如、額にガツンと重く鋭い衝撃が走り、雁夜の嘲笑を強制的に止めた。痛みでチカチカと明滅する視界に、漆黒の籠手が見える。それはデコピンの形をしていた。

「グルル……」

「バーサーカー……?」

初めて聞く、狂戦士じみた血に飢えた獣の唸り声に、雁夜はゾツと息を呑む。雁夜を見下ろす双眸から感じる気迫が、いつもよりずっと鋭い。バーサーカーは　怒っている。

（そうだ。俺は……俺は、何を考えていたんだ？桜を救うために協力してくれと言ったくせに、俺は自分の復讐のことしか考えていないのか！？そんなくせに、俺は自分の復讐のことしか考えていないのか！？）

なぜバーサーカーが怒ったのかと想像し、答えに至った雁夜は激しく己を恥じた。後悔と悔しさに思わず涙が溢れる。これほどまで自分を浅ましいと感じたことはなかった。

「……すまない、バーサーカー。それと……ありがとう」  
「ぐるるっ」

押しつぶさんばかりの剣幕を見せていたバーサーカーがヒラヒラと手を振る。「気にするな」ということだろう。その厚情に雁夜は再び涙を流す。バーサーカーがサーヴァントになつてくれたことは素晴らしい僥倖だ。この戦争を勝ち抜く上で非常に心強いし、何より、道を外れそうになつたら引き戻してくれる友人を得られたのだから。

「……そういえば、バーサーカー。お前、セイバーに襲いかかる時に貧乳とか言わなかつ　ぶべらっ!？」

再び額に衝撃。なぜ、と考える暇もなく、雁夜は強制的に休息の眠りについた。

⌘バーサーカーサイド⌘

サーヴァントとマスターの感覚って繋げられるんだっけか？俺が貧乳派などというデマが流れると困るし、雁夜おじさんにそう思ってもらうのも心外だ。俺は巨乳派なのだ。大は小を兼ねる。たゆんたゆんしてないオツパイはオツパイとは認めません！セイバーに襲いかかる時に罵倒して冷静さを失わせてやろうと考えた結果がアレだったわけだが、まあまあ上手くはいつてみたいだ。でも雁夜おじさんにそれを説明するのが面倒くさいので、とりあえずデコピンで眠ってもらおう。

「ぶべらっ!?!」

うん、よく寝てる。俺にたくさん魔力を送ってくれたから死ぬほど疲れたんだ。だから、ついつい目的が時臣おじさんへの復讐へと流されてしまっただよ。ゆっくり休ませてあげよう。

しかし、さっきの戦いは自分でも驚くぐらい偶然が重なっていい方向に進んでくれた。原作やアニメでケイネス先生が潜伏してる位置はだいたいわかってたから、ギルガメッシュが射出してきた宝具から広範囲に渡って爆発しそうなものをチョイスして奪ってやったのだ。それを「あの辺りだったかな？」って方向に投げてみたら見事にドッカーン！なわけですよ。マスターを失ったランサーも消滅してくれました。原作ではソラウが魔力補給担当だったんだけど、やっぱりマスターという繋ぎがないとダメなんだね。こっちは手出しはせずにセイバーと一対一で戦って貰ったら、負けたけどなんか満足そうに消えて行きました。ランサーも原作みたいにならなくてよかったなあ。これも夢補正ってやつなのかもね。

それと、ライダーとウェイバーの会話をこっそり聞いていたけど、なんか雁夜おじさんの評価が鰻登りみたいだ。これも嬉しいことだ。サーヴァントとして鼻が高いよ。やったね雁夜ちゃん！評価が高い

よ！

「ん……バーサーカー……」

桜ちゃんが寝言で俺を呼んでいます。可愛いですね。頭を撫でてやるとくすぐったそうに微笑みます。大丈夫、君も雁夜おじさんも絶対に死なせないよ。目覚めの悪い夢にはさせないさ。

アーチャーの短刀を決意を込めて握りしめ、自らの戦場に向かう。さあ、ここからが俺の本当の戦いだ

！！

キケイネス先生サイドキ

「こ、ここは……?」

「ああ、よかった！目が覚めたのね！」

「ソラウ？」

ケイネスが目を覚ますと、そこは真っ白な部屋。病院の集中治療室のようだった。日本語が表示された機材は全てが最新のものら

しく、磨き上げられて清潔だ。それらから伸びたコードはケイネスの身体のありとあらゆる場所に繋がっている。鉛のように重い身体で声の方に首を動かせば、妻のソラウが涙を浮かべて駆け寄ってきた。

「私は、バーサーカーのマスターにしてやられて、それから……どうなったんだ？ランサーは？聖杯戦争は？」

何一つ状況がわからないケイネスに、ソラウは心底残念そうな顔で応える。まさに夫を心配する妻そのものだ。このような親身な表情を向けるなど、今までなかったことだ。この異変もケイネスを混乱させた。

「負けたわ。セイバーと戦って。あなたはバーサーカーの攻撃を受けたけど、自動発動した<sup>ヴァールメン・ハイドロシラム</sup>月霊髄液がクツシオンになって何とか一命は取り留めたの。そして重症のところをこの病院に担ぎ込まれて、ずっと眠っていたのよ。なんとか回復はしたけど、それでも怪我がひどくて……」

それきり、ソラウが潤んだ瞳で押し黙る。自分に言い辛いことがあるのか。背筋を寒気が走った。

「私は、何か取り返しがつかないダメージを負ってしまったのか？」  
「……全身を大やけどしたの。しばらくリハビリをすれば動けるようにはなるし、魔術回路も無事だけど、もう元の姿には……」  
「……そう、か」

自分の顔に愛着がなかった、と言えば嘘になる。決して美貌ではなかったが、才能と経験に裏打ちされた知性を感じさせる容貌ではあったと思う。自分の顔を失ってショックを覚えられない人間はいない。

（だが、私はそんな凡庸な人間ではない。どんな顔になるうが、私がケイネス・エルメロイ・アーチボルトであることに変わりはない！）

己を叱咤して、ついくしゃりと歪みそうになった表情を引き締める。なぜかはわからないが、ソラウが自分に対して素直に好感情を向けてくれるようになった。想い人が自分を好くようになってくれたのだ。一番欲しかったものを手に入れたとも言える。顔を失っても、それを上回る収穫はあった。

（やはり、ソラウはランサーの呪われた黒子に操られていたただけなのだ。ランサーがいなくなったから、正気に戻ったのだ）

チラ、と視線をソラウに流せば、ソラウはなぜだかうつとりと陶醉するようにケイネスの顔を眺めていた。ベッドの枕元に両肘を突き、ニマニマと満面の笑みを浮かべている。焼け爛れた顔の何がそんなに嬉しいのだろうか。一抹の疑念を感じつつ、妻に告げる。

「ソラウ、鏡をくれないか。自分の顔を見たい。どんな顔になったのか、知っておくべきだ」

「ええ、いいわよ」

弾むように返答をして鏡を持ってくるソラウに再び首を傾げつつ、鈍い動きで鏡を受け取って自分の顔を映す。

さあ、どんな醜い顔が出てくるのか。

「……………」

「いい顔でしょ？最高のモデルがいたのだから当然よね。せっかく整形してもらうんだからちよっと奮発したの。医師免許はないけど

凄い手術技術を持つ黒尽くめのブラックなつかって医者に頼んで、ソックリに整形してもらったわ。どう、かっこいいでしょ？デイルムッド　　じゃなくてケイネス？」

「……………」

どこからどう見ても、ランサーの顔だった。鏡に映る、輝く貌の異名を持つイケメンそっくりに改造された己の顔面とその横で嬉々とする妻に、ケイネスは真っ白になって向き合い続けた。後に“時計塔のイケメン講師”と呼ばれる男の、始まりの瞬間である。



#### 1 - 4 ケイネス先生の中の人ひとりっぴいと同じ（後書き）

区切りのいいところまで書こうと思ったら更新がだいぶ遅くなりました。二作品同時進行だからキツイですが、書いてて楽しいので頑張ります。

2 - 1 バーサーカー「私の資格取得数は53万です」(前書き)

誤字脱字報告感謝です！タイトルが1 - 5になってたり、お恥ずかしいことでも、(でも「時すでにお寿司」は誤字じゃないです。わかりにくくてごめんねごめんねー！！

## 2 - 1 バーサーカー「私の資格取得数は53万です」

聖杯戦争二日目の夜

キセイバーサイドキ

「まあ、取り次ぎはごゆるりと。私も気長に待たせていただくつもりで、それなりの準備をして参りましたからね。なに、他愛もない遊戯なのですが、少々、御庭の隅をお借りいたしますですよ？」

キヤスター ジル・ド・レエがその不気味な眼球をぎよろりと愉悦に歪ませる。

キヤスターは何を思い違いをしたのか、セイバーをジャンヌ・ダルクと完全に思い込み、己の物にしようとしてつけ回していた。そして今、ここアインツベルン城にまで侵入してきたのだ。千里眼の水晶の向こうから逆探知してこちらを覗き見するという神業はキヤスタークラスだからこそその芸当である。

無論、天下に名高いアインツベルンの領地が、例え極東の田舎山中の小城とはいえ無防備であるはずがない。周囲にはアイリスファイールの意思によって発動するあらゆる魔術的な罠が仕掛けられているし、切嗣が仕掛けた強力な爆薬類も備えられている。横で無表情を浮かべている彼が、その配下の舞弥が手元の機器を操作すれば、凶悪な兵器が一斉にキヤスターに襲いかかるだろう。彼らがそれらを使用しないのは、単にキヤスターの底なしな悪辣さ故であった。

(人質など 卑怯なツ)

内心に憎悪を爆発させ、セイバーが奥歯を砕かんばかりに噛み締め

る。キャスターに、数十人もまだ幼い子供たちが臆気な表情で付き従っていた。魔術で操られているに違いない。罨を発動すれば、子どもたちを犠牲にしてしまう。キャスター一人を狙うことのできる指向性の罨などほとんどないし、あってもサーヴァントには痛くも痒くもないものだ。とどのつまり、この状況は人質を利用してセイバーを誘いだすためのものに他ならない。

こちらの逡巡を見透かし、再度笑みを浮かべたキャスターがパチンと指を鳴らす。途端、子どもたちは正気に戻って邪悪な男に怯え始める。

『さあさあ坊やたち、鬼ごっこを始めますよ。ルールは簡単。この私から逃げ切れればいいのです。さもなければ』

『ひいつ……』

言い終わらない内に、ロープの裾から手をするりと差し伸ばし、手近な所にいた一人の少年の頭に手を載せようとする。赤みがかった髪少年は怯え竦んだまま動けない。

(まさか……!?)

セイバーの鋭い直感スキルは、魔術師とは思えないその筋肉質な腕に最悪の事態を想像させる。同じ想像をしたのであるうアイリスフールが息を呑んで目を見張る。

「やめ　　！」

やめろ、とセイバーが悲鳴じみた叫びを上げかけた、その瞬間。

『グルル』

『は?』  
「え?」

少年の頭を握り潰そうとしたキャスターの腕を、唐突に横合いから突き出たさらに太い剛腕が掴み止めたのだ。グシャリと鈍い音を立て、キャスターの腕が醜く歪む。その剛腕が纏う黒鉄の鎧をセイバーは見間違えることなどできない。それは、セイバーが今回の戦争でもっとも苦手とするサーヴァント。

ジャーンジャーン!!

『ゲエーッ!!バーサーカー!!』

『ウゴゴ　　!!』

『ほ、ほわああああ!!』

水晶の向こうで乱闘が始まったかと思うと、千里眼の映像がブツリと消え失せた。膨大な魔力の塊であるサーヴァント同士の衝突の余波で観測不能になったのだ。

突然の急展開に、四人は思い思いの表情で呆然とする。だが脳裏に浮かぶ疑問は同じだった。計ったかのように同じタイミングで顔を見合わせた四人が、同じタイミングで呟く。

「……………どうしてバーサーカーが?」

「やっと私と目を合わせてくれましたね、切嗣!」

「え?あ、しまった!今の無し!ノーカン!」

時間は遡り、二日目の朝

±雁夜おじさんサイド±

「おじさん、朝だよ！起きて！」

「…………おはよう、桜ちゃん」

「おはよう、雁夜おじさん！」

生きて朝を迎えられたことより、元氣そうな桜の笑顔を見られたことが嬉しい。寝ぼけ眼に浮かんだ涙を寝起きのせいにして、雁夜はゆっくりと身を起こした。間桐の魔術に蝕まれたせいで、つい先日まで眠りから覚める度に死の淵を彷徨っていたというのに、今は多少の身体の怠さ以外は何も苦はない。麻痺していた左半身も少しずつだが動かせるようになっていく。サーヴァントとレイラインで繋がっていることが何か効果を及ぼしているのか、それともロウソクが最後の瞬間に一際強く燃え上がるように自分も終わりに近づいているのか…………。

（それでもいいさ。むしろ最期に全力を出せるのだから、望むところだ）

昨夜の戦闘のために雁夜はかなりの無茶をした。しかし、その分得たものも大きかった。早々にランサー陣営を脱落させられたのだから。バーサーカーに叱責された直後に気絶してしまっただが（なぜか額が痛い）、まだ生き長らえている。この分なら、聖杯を手に入れ

るまではこの身体も耐えられるかもしれない。いや、堪えてみせる！！  
決意を新たに聖杯に救済を求める少女を見れば、まだパジャマ姿の桜が窓から身を乗り出して階下の庭に笑顔を向けていた。乾いた唇や気だるそうな動きに違和感はあるものの、桜の容態は安定しているようだ。

「バーサーカー！お庭のお手入れお疲れ様ー！雁夜おじさん起きたよー！」

「庭のお手入れ……？」

不意に感じた嫌な予感に、雁夜も桜の後ろから窓の外を見下ろす。直後、雁夜の口から「うわぁ……」というなんとも言えない声が漏れた。

「見て、雁夜おじさん。すっごく綺麗になったでしょ？全部バーサーカーがしてくれたんだよ？」

「たしかに綺麗になったけど……」

間桐邸と言えば、近所からも忌避され、近づく者もない不気味な屋敷として有名だ。放置され生い茂る木々や外壁を覆い隠す蔭によって年中陰鬱とした間桐邸は、その不吉で威圧的な様相から半ば幽霊屋敷のような扱いを受けていた。そう、受けていたはずなのだが。

「わぁ、可愛い！この木、ウサギさんの形してる！」

「こっちはライオンだ！かっけー！」

「これ鎧の兄ちゃんが作ったの！？」

「ぐるる！」

「すっげー……！」

屋敷がもう一つ建てられそうな広さの庭園は、見事にファンシーなお庭と化していた。

鬱蒼として陽光を遮っていた木々はウサギさんやらライオンさんやらに姿を変え、蟲や蛇の巣窟だった茂みはハート型やボール型になっている。腰の高さまで生い茂っていた雑草だらけの芝生もまるで絨毯のように均等に切り揃えられ、青々とした輝きを朝日に反射して目に眩しい。蔦で覆われていた外壁もすっかり綺麗になり、まるで建造したばかりのような鮮やかな色彩を魅せつけている。朝の澄んだ空気に満たされて眩い光に煌めく庭の様相は、まるでファンタジー世界のお城に迷い込んでしまったかのような錯覚すら感じさせる。

そして、たった一夜でお化け屋敷を瀟洒な豪邸に変貌させた当人は、通りがかりの子どもたちからの無垢な賞賛に胸を張ってその腕前を自慢していた。

「うごごごー！」

「キリンさんだ！すごい！」

「鎧の兄ちゃんすっげえ！」

バーサーカーが宝具化した漆黒の高枝切りバサミを閃かせた途端、庭の一角に新たな動物が誕生して子どもたちの歓声が響き渡る。その黄色い声に、雁夜はげんなりと顔を歪ませて頭を抱える。相棒の邪気のない行動にはだいぶ馴れてきたと思っていたが、どうやらまだまだのようだ。

「おいこら、バーサーカー！無闇に人前に入るんじゃない！お前、自分がサーヴァントだって自覚あるのか！？」

「きゃー！ゾンビだー！」

「顔半分がゾンビのお化けが出た！鎧の兄ちゃんやつつけて！」  
「誰がゾンビだ！まだ辛うじて生きてるわ！っーか、お化けはそっ



「ちの鎧の方だ！」

逃げてゆく子どもに喚き立てる雁夜を見て、桜がくすくすと忍び笑いを漏らす。桜は雁夜とバーサーカーの掛け合いを漫才のように思っている節がある。雁夜としては本気で怒っているわけだが、桜の笑顔を見ると怒りも霧散してしまうのだった。

「うーん」

「はいはい、おはよう！庭はもういいから、早く中に入ってくれ！」

「バーサーカー、お腹すいたよー」

「ぐるる」

庭から手を振ってくるバーサーカーに適当に手を振り返す。いつの間にかバーサーカーの言わんとすることがなんとなく理解できるようになったのは、やはり馴れのなせる技かもしれない。

のっしのっしと台所に向かうバーサーカーの姿を見届け、雁夜も階下に降りることにする。ため息を吐き出すと、空になった腹がぐうと音を鳴らした。そういえば、ひどく腹が空いている。昨夜の戦闘で魔力を大量に消費したせいかもしれない。とにかく、何か腹に入りたい。美味しいものを口にしたい。昨日のグリーンカレーの美味を思い出し、口内がじわりと潤う。今朝の朝食を予想するのに胸が高鳴ることなど生まれて初めてだった。

「今日の朝ごはん、なんだろうね？おじさん」

「うーん、なんだろうな。でも、きつと美味しいよ」

「私もそう思う！」

二人でにこやかに階段を降りる様子は、傍から見れば仲睦まじい父娘にしか見えない。事実、本人たちも互いをそのように考え始めていた。これでご飯を作ってくれているのが母親であれば完璧なのだ

が。

「そうそう、バーサーカーって造園技能士の資格も持つてるんだって！」

「ぐるる(肯定)」

「……もうツッコまないぞ」

キアサシンサイドキ

「ば、バーサーカー陣営に、ぐすっ、動きは、あ、り、ま、ぜん、

……！」

『……お前、本当に大丈夫か？他のアサシンと交代した方がいいんじゃないか？』

「大丈夫ですっ！」

『そ、そうか。監視と報告は怠るなよ？』

「ばい、っ！我が主っ！」

明らかに涙声のアサシンの返答にドン引きしつつ、「今度マーボアの差し入れでもやるうか」と柄にもないことを思いながら綺礼は通信を終えた。

激しく嗚咽に震えるアサシンの視線の先では、バーサーカーが庭の掃除と手入れにこき使われ、子どもたちにからかわれ、マスターから罵声を浴びせられていた。バーサーカーの苦勞と屈辱を思うと、情に厚いこのアサシンは涙せざるを得なかった。

(バーサーカー、頑張れよ……！)

2 - 1 バーサーカー「私の資格取得数は53万です」(後書き)

これから年末にかけて仕事が大忙しなので、更新が不透明です。出  
来ている分まで投稿します。

皆、いくらガソリンスタンドで洗車すればいいやつて思っているか  
らって、あまりに汚い車は掃除に凄く手間取るからちょっとは自分  
で掃除をしような！放置しすぎて車の床が砂場になってたり、砂利  
が敷いてあったり、ピスタチオの殻やかいかメモシの死体が散乱  
しまくってたりする車は店員もさすがにドン引きだよ！お兄さんと  
の約束だ！

## 2・2 白菜の漬物こそ至高（前書き）

日曜だったのでちょっと書き進めることができました。

今回、1・2でバーサーカーのステータス隠しの幻惑宝具の効果が薄くなっていた理由が明らかになります。何かに使えないかと適当にフラグ投下！していたら、良い感じに拾えました。

グラントウォーカー！！

## 2 - 2 白菜の漬物こそ至高

±雁夜おじさんサイド±

ポリ、という適度な歯ごたえと共に広がる、少し強めの塩味。

野菜本来の味と芯まで染み込んだ塩気が口腔内に膨らみ、唾がじゅわっと溢れでてくる。この機を逃すまいと、すかさず炊きたての白米を口に放り込んで噛みしめれば、ほんわかとした熱さと米特有の柔らかな甘みが爆発して思わず鼻から荒い息が吹き出る。

「バーサーカーのお漬物、美味しいよお」

隣では桜が涙すら浮かべてはふはふと口に白飯を運んでいる。同感だ。もっとも雁夜の場合は、涙を流す暇すら惜しいほど白飯を頬張っているのだが。

朝食は実に質素なものだった。白飯、漬物、少量の焼き鮭、千切りキャベツ、味噌汁。だがどれも、天下一品の美味さだ。少し強めの塩味が効いたおかずと真珠のように白銀に輝く炊きたての新米の組み合わせに勝るものはない。丹念に骨抜きされた焼き鮭は脂が載っていてジューシーだ。そのカリカリに焼けた皮に舌鼓を打ちつつ、再び白飯を頬張る。やはり美味い。鰹だしでしっかりと裏打ちされた赤味噌の味噌汁も、味噌のコクを残しつつもさっぱりとしていてとても飲みやすい。

「ふう。ごちそうさまでした！」

雁夜と桜がぺろりと朝食をたいたら、同時に手を合わせる。見事に重なった食後の礼に、互いに苦笑する。それを優しげに見守るのはエプロンをつけたバーサーカーである。うんうんと頷いているあた

り、彼も自分の料理を食べてもらえることに喜びを覚えているようだ。

「うーうーうー」

「デザート！？いるいる！」

「…………俺ももらおうかな」

桜は完全にバーサーカーと意思疎通が出来ているらしい。そのことに若干驚きつつも、食後の満足感の前にそんな些細なことはすぐさま立ち消えてしまった。純日本食の朝食など久々に口にしたが、やはり自分は根っからの日本人なのだということを改めて思い知らされた。魔術師だとか間桐だとか言う前に、自分は日本人なのだ。ビバ、日本人！ビバ、日本食！！

「リンゴだ！ねえ、ウサギさん作ってウサギさん！」

「ぐるる〜」

「きゃあ、可愛い！ありがとうバーサーカー！」

懐から取り出した黄金の短刀でデザートのリングを器用に切っている。桜にせがまれるとあつという間に可愛いウサギが出来上がる。分厚い籠手を装着していてもこの器用さなのだから、生身ならどれだけの腕前なのやら。

しよりしよりとリングの皮を途切らせることなく剥いていく手際の良さに思わず目を奪われる。まるで機械のような精密さと人間味を感じさせる繊細な指使いは熟練の職人を彷彿とさせる。アーチャーの短刀の切れ味の効果もあるのかもしれないが、それでもバーサーカーの自身の技術が……………

アーチャーの短刀……………。

アーチャーの短刀……？

アーチャーの短刀!!!???

「それ！は！アーチャーから奪った宝具じゃないかあああああああああああああ……！」

冬木市の一角で、苦労人の雄叫びが響き渡った。聖杯戦争一番の苦労人、間桐雁夜の朝は今日も通常運転である。

……

……

…

「大体なあ、お前にはシリアスが足りないんだよ！もつと真面目に  
おい、聞いているのかバーサーカー！」

「うんうん(、)、(、)」

「おじさん、口の横にリンゴついてるよ。とってあげるね」

「本当に聞いて ありがとう桜ちゃん。とれた？」

「うん、とれたよ。リンゴも一個いる？」

「いや、最後のは桜ちゃんが食べなよ。おじさんはもうお腹いっぱいだから」

「えへへ、ありがとう」

しゃりもぐしゃりもぐとリンゴを頬張りながら、洗い物をする己のサーヴァントの背に向かって説教をする雁夜と、その横で同じくリ

リングを齧る桜。他のマスターが見たら卒倒しそうな光景だが、三人にはすっかり日常と化していた。

（まったく。バーサーカーは真面目なのか不真面目なのか判断がつかないな。……それにしても、このリングは美味しいな）

最後のリングを桜に譲ったことをほんの少し後悔してしまうくらい、バーサーカーが切ったリングは美味かった。舌触りの良い果肉と芳醇とした瑞々しい甘さはそんじょそらのスーパーで買えるレベルには思えない。ルビーのような真紅の皮と黄金色の果肉は宝石のように美しい。しかし、バーサーカーが買ってきた時は極普通のリングであったし、元々間桐邸にあったものでもない。

（アーチャーの宝具で切ったせいなのか？）

考えられる原因は1つだけだ。神々の宝物、人類の至宝、想念の結晶。有り得ない事象を実現する究極のモノ、“宝具”。特にあのアーチャーの神々しい迫力を考えるに、その所有物であった宝具の等級も相当なものに違いない。そんな人知を超えた奇跡の塊に触れたのだから、リングもその恩恵を受けて当たり前なのかもしれない。

（待てよ？じゃあ、その“奇跡の食べ物”を口にした俺の身体はどうなるんだ？）

麻痺して動かない己の左顔面に触れる。いつも通り、死後硬直した死体のようにざらざらとして硬い皮膚だった。だが、表皮の下に、ほんのりとした人肌の温かさが蘇っていることに気付く。

「……なあ、バーサーカー。もしかして、その短刀を奪った目的は最初から」



ドン！

「うつ！？」「きゃっ！？」「……グルル」

唐突に、遠く重い破裂音が腹底に響いた。通常の『音』ではなく、魔術師のみに察知できる魔術的な信号弾。つまりは魔力のパルスだ。目を白黒させる雁夜と桜を尻目に、落ち着いた様子のバーサーカーが東の方角の窓を開ける。晴れ渡った青空に、チカチカと光る不思議な花火が光っていた。何らかの呪香を織りまぜているらしく、魔術師にだけ目にできるような仕掛けが施されている。明らかに戦争に参加しているマスターとサーヴァントに向けた合図だった。

（あの方角は……冬木教会か？監督役の教会がいったい何の用なんだ？）

教会は戦争中はあくまで裏方に徹するはずなのだが、何かあったのだろうか。

「雁夜おじさん、あれは何なの？」

「わからない。とりあえず使い魔に見に行かせるよ。桜ちゃんは安心して寝てていいんだよ」

「ウゴゴ」

「……うん、おやすみなさい。バーサーカー、おじさん」

桜が自室に戻るのを見届け、使い魔の蟲を放つ。桜の前で蟲を見せるのは憚られた。

「……バーサーカー、何だと思う？」  
「グルル」

他の人間が見ればわからないだろうが、雁夜には彼の変化がよく見て取れた。その視線も呻き声も、緊張を孕んで鋭く低くなっている。只事でない何かを感じ取っているのかもしれない。先までの温厚な雰囲気脱ぎ捨て、歴戦の戦士の気迫を放っている。その双眸が「用心しろ」と言っている。

「ああ、わかってる。大丈夫さ」

(なんとって、お前という頼もしいサーヴァントがいるんだからな)

余裕すら感じさせる笑みを口端に浮かばせ、雁夜は目を閉じて使い魔と意識をリンクさせた。

……

……

…

「連続殺人犯がマスターになって、サーヴァントも暴走 …… !？」

使い魔を介して見聞きした老神父の言葉に、雁夜は瞠目して声を荒らげた。

監督役、言峰璃正から告げられた下手人の存在は、雁夜を大いに驚かせ、怒りを覚えさせた。魔術のイロハも知らない殺人犯が何の偶

然かマスターになり、サーヴァントの力を利用して誘拐事件を乱発している。しかも、その毒牙の対象は　　桜と同じ年代の、幼い子どもたちだという。力の弱い者を平気で踏みじり、まだ何も知らない無垢な生命を侮辱し、冒瀆し、無残に強奪する。吐き気を催す、唾棄すべき邪悪な行為だ。

(そんなこと、許されていいことじゃない！)

元々、魔術の持つ陰惨さを嫌って間桐家を飛び出した雁夜のモラル感覚は、一般人と何ら変りない。むしろ、より強く『平和な日常』を愛している。間桐臓硯による悪辣な修行と遠坂時臣への嫉妬と憎悪でその感覚は失われつつあったが、桜とバーサーカーとの触れ合いによって鬱屈としかけていた性根もすっかり元に戻っていた。子どもを害する、という許されざる悪行に、雁夜の中の正義感が轟々と燃え上がる。

(もしも、奴らの魔の手が桜ちゃんや凜ちゃんに及んだら……!!)

想像するだけで背筋を悪寒が走る。自分の命より大事な彼女らを危険に晒す者なら、何よりも優先して排除しなければならない。もはや、「キヤスターを倒した陣営には令呪を一つ進呈する」という璃正の誘惑など雁夜には何の意味もなくなっていた。一刻も早く、キヤスター陣営を打倒しなければならない。

「バーサーカー、やるべきことが増えた。もちろん引き受けてくれるな？」

雁夜の問いかけに、バーサーカーが胸甲をガシャンと叩いて応える。兜の目庇から滲み出る灼熱の眼光が、義憤の色に染まっている。彼もまた、雁夜と同じく弱き者をいたぶる外道を許せないに違いない。

相棒  
サーヴァントとの意見の一致に、雁夜は力が漲るのを感じた。

(問題は、キャスター陣営の居場所がわからないってことだ。あの神父も詳細については知らないようだった。自力で探すしかないが、相手が魔術師<sup>キャスター</sup>クラスとなると難しいな。どうやって居場所を特定するか……)

「……あの、おじさん、バーサーカー。邪魔してごめんなさい。でも、やっぱり一人じゃ怖くて寝れなくて……」

控えめに発せられた声に振り返れば、枕をぎゅうつと抱きしめた桜が今にも泣きそうな顔で二人を見上げていた。その姿に心臓を鷲掴みにされたような保護欲を掻き立てられ、雁夜は慌てて桜の元へ駆け寄ろうとする。蟲蔵から解放されたとは言え、まだ悪夢にうなされることがあるに違いない。まだ10にも満たない少女にとってアシは精神を苛むトラウマだ。傍にいてやらなければ。

「ああ、じゃあおじさんが……バーサーカー？どうしたんだ？」

駆け寄ろうとした雁夜の肩を、バーサーカーが掴み止めていた。人外の握力が雁夜の動きを制限する。血飛沫のように紅くキラつく双眸は、眼前の雁夜ではなく桜を見据えていた。まるで『物』を仔細に観察するかのような無機質な視線に、最悪の可能性が頭を過ぎる。

「バーサーカー、お前、まさか桜ちゃんを囮に使うつもりじゃ……！？」

猛獣を捉えるためにわざと獲物をチラつかせ、食いついたところを狙う。合理的な作戦だ。だがそれは、その獲物が子どもでなければ、

の話だ。雁夜には到底受け入れられる話ではない。バーサーカーの腕を渾身の力で振り払い、桜を庇うように立ち塞がる。

「そんなことは絶対に許さ

「ぐるー！（、・\*）」

え、違う？」

今度はバーサーカーが怒る。「誰がんなことするか！」と言わんばかりに腰に手を当てて唸る。冷静に考えれば、彼が子どもを囮に使うなんて言い出すはずがないのだ。ホッと安堵し、そしてさらに首を傾げる。

（じゃあ、一体何なんだ？）

「……ん？なんだ、目が霞む……？」

バーサーカーの不可解な行動を理解できずに悩んでいると、不意に視界が歪みはじめた。目の前のバーサーカーの姿が急激にボヤけ、不鮮明になってゆく。輪郭がボヤけ、霞み、身体の大ささすら判別できなくなる。だというのに、バーサーカー以外には何も異常は見られない。否、その現象はバーサーカーだけに起きていた。彼独自の幻惑宝具が、ステータスを隠すだけの役割を終え、本来の力を使ってバーサーカーの姿をまったく別の何かに変身させようとしているのだ。

果たして、変身が完了したその姿は、

「ぐるー！」

「な、な、なア　　ッ！？」

「わあ、バーサーカー、そんなことも出来るの！？」

雁夜が見下ろす先にいるのは　　桜と瓜二つの姿となった、己の

サーヴァントだった。

「バーサーカーサイドキ

教会からのお知らせ花火だ。言峰父からのキャスター討伐のお誘いだろう。せっかく二人が美味しそうにご飯を食べてくれていたというのに、胸糞悪い話を持ってきやがって。イエスロリータ、ノータッチ！これ世界の常識ですよ。雁夜おじさんも子ども殺しに大変お怒りのようです。ボクらとっても気が合いますね！まあ、俺は巨乳お姉さん派なんだけどな！アイリスフィールマジ天使！

「バーサーカー、やるべきことが増えた。もちろん引き受けてくれるな？」

もちろんだぜ。雁夜おじさんが熱い男になってくれて俺は嬉しいよ。さて、問題はキャスター陣営にどう近づくかだ。キャスターの真名がジル・ド・レエだってことも、セイバーをジャンヌと思いついてストーリーカーしてるから今夜アインツベルン城に出現することもわかってるんだけど、待ち伏せするのは難しい。腐ってもキャスタークラスだからバーサーカーの接近はすぐに気付かれるだろうし、アインツベルンの領地に気付かれずに隠れてるなんて芸当も出来そうにない。俊足のランサーや元代行者の綺礼の侵入も感知できるくらいなんだから。油断させてこっそり近づき、無防備なところをボコるしかない。となれば、アレを使うしかあるめえ！

「……あの、おじさん、バーサーカー。邪魔してごめんなさい。でも、やっぱり一人じゃ怖くて寝れなくて……」

お、ちょうどよかった。対象の姿をしつかり観察しとかないとボロが出るかもしれないからね。細部まで観察しておきましょう。なんか雁夜おじさんが失礼なことを言ってきたのでちょっと怒りました。僕で可憐な桜ちゃんを困にするなんて鬼畜な所業をしそうな顔に見えるのかよ！顔は見えないけどな！

「……………ん？なんだ、目が霞む……………？」

さあ寄ってらっしゃい見てらっしゃい！これぞ、ランスロット固有の補助宝具であり、俺が原作のバーサーカーと唯一ちよつとだけ違いがある宝具！その名も、『己が栄光の為でなく』だ　　！！

「な、な、なア　　ッ！？」

おお、雁夜おじさんが出川みたいにめっちゃ驚いてる。そこまで清々しいリアクションをしてくれると俺としても驚かせた甲斐があったってもの　　あ、気絶した。

2 - 2 白菜の漬物こそ至高（後書き）

思わず涎が垂れてきそうな美味しい食べ物の描写を書けるようになり  
たい。



2 - 3 荒木先生は元新選組副局長（前書き）

31日も仕事！年始も3日から仕事！！

## 2 - 3 荒木先生は元新選組副局長

± 雁夜おじさんサイド±

あ…ありのまま 今 起こった事を話すぜ！

「バーサーカーの姿が変わったと思ったら 桜ちゃんになっていた」  
な… 何を言っているのか わからなーと思うが

おれも 何をされたのか わからなかった…

頭がどうにかなりそうだった… 催眠術だとか超スピードだとか  
そんなチャチなもんじゃあ 断じてねえ  
もつと恐ろしいものの片鱗を 味わったぜ…

「いい、バーサーカー？変な人について行っちゃダメなんだよ！わ  
かった！？」

「ぐるる」

「いやいや、バーサーカーは困んだからむしろ付いて行かないと  
ダメなんだけど」

桜に変身したバーサーカーを囷にしてキャスター陣営をおびき寄せ  
る、というバーサーカーの作戦に従い、夕刻、彼が閻桐邸を出発す  
る。自分そっくりの少女を悪漢に襲わせるという作戦に桜が不満を  
持つかもしれないと不安になったが、「バーサーカーならいいよ」  
と快く了承してくれた。でも頬を染めながら言わないで欲しかった  
な。おじさん凄く不安になっちゃうよ。

「あ、そうだ。お外に出るんだからお化粧もしくちゃね。ちよつ  
とこつち来て！」

「うぐぐ」

桜は自分と同じ姿になったバーサーカーに対して妹のように甲斐なく接している。やはり、年下の肉親が欲しいという気持ちがあったのだろう。自分も末っ子なのでその気持は良くわかる。見ていて微笑ましいが、片方の中身が全身鎧の大男なのだと思うと非常にシニールだ。

変身後のバーサーカーは本当に桜に瓜二つだ。瞳の色が炎のように揺らめく赤に染まっていることと、声質が少女のソレになっても相変わらず「ぐるる」「うぐぐ」しか話せないこと以外は。

(武器の扱いに長け、手に持ったものを自分の宝具に出来て、しかも変身能力まで持つ騎士の英霊、か。いったい誰なんだ?)

雁夜はフリーライターを生業にしていたため、各地の歴史や伝説、それらに纏わる雑学も人並み以上に諳んじている。幾人が該当するような英霊の候補が思い浮かぶものの、目の前の幼女化した騎士に当てはまりそうな者はいなかった。

(そもそも、和食を作ったり、栄養士やら造園技能士の資格を持つてる騎士なんているわけないしな)

そんなに資格をとりまくっているのは暇を持て余しているなんちゃって大学生くらいなものだ。当然、このバーサーカーの中身が大学生だということは有り得ない。

これ以上考えてもわかりそうにないと断じ、雁夜は思考を放棄した。魔術師として未熟な自分が敵による催眠や拷問に屈し、バーサーカーの真名を口にしてしまうという最悪の可能性も考慮し、自分は知らない方がいいとも考えた。知らなくても支障を来すことがないのは、先の港湾区画の戦闘で証明されたバーサーカーの実力でよく理

解できた。今、桜に化粧を施されている幼女の姿は仮の姿であり、  
本当は誰よりも優れた猛者なのだ。

「こうやってベージュのシアールリップで清楚なナチュラルキレイを  
演出しつつ、同じ色のちよっとマットなリップペンシルで唇の輪郭  
をなぞるとふつくらして見えてすごく女っぽくなるの。香水もラン  
バンマリーのオードパルファムで艶っぽさを強調して、ホワイトの  
ロングスカートとのギャップを際立たせると男を惹きつけるのに効  
果的なのよ」

「うーっお……（、、..）」

「動いちゃダメだよ、バーサーカー！くすぐったいけど我慢して！」

……本当は誰よりも優れた猛者なのだ。

「……ねえ、桜ちゃん。そのオシャレの方法も凜ちゃんから聞いた  
の？」

「ううん、お母さんから。『いい男を見つけるためには清楚な女を  
演じればいいのよ』って」

「葵さんんんんんんん！！？？」

恋焦がれていた幼なじみの思いがけない一面を知って崩れ落ちる雁  
夜をよそに、ピンクのランドセルを背負わされたバーサーカー（幼  
女）が玄関の戸を開ける。

「ぐるるー！（、..）」

「行ってらっしゃい！ヘンタイどもの首をねじ切って晒し首にして  
やってね！」

「俺には……好きな……人が……」

何とも形容しがたいカオスな出陣式を背に、バーサーカー（幼女）

はいざ戦場へと間桐邸を後にした。

㊦アサシンサイド㊦

あ…ありのまま（ry

間桐邸を一望できる高木の頂上で、間桐邸の監視を下命されたアサシンがあんぐりと口を開けて硬直していた。

それもそのはず。バーサーカーが玄関から出てきたと思ったら、少女の姿になっていたからである。暗殺者として鍛え抜いた第六感はそれがバーサーカーであると明言しているが、暗殺者として何より信頼してきた観察眼もまた、それが少女であると宣言している。

（つまり、バーサーカーの中身は少女だったということか？いやしかし、質量的に無理がある。だが目の前のバーサーカーは少女の姿をしている。やはりバーサーカーは少女だったのか？いや、しかし少女が鎧の大男なのはおかしい。だが目の前の　　）

そのうちアサシンは考えるのをやめた。

時間は戻り、聖杯戦争二日目の夜。  
アインツベルンの森

㊦セイバーサイド㊦

セイバーは駆けていた。闇が立ち込める暗く深い森を獅子のように

駆け抜け、倒すべき敵に向かってひたすらに走る。月明かりに照らされ、白銀の鎧と頬を伝う汗がキラリと光る。

「セイバー、キャスターとバーサーカーを倒して」

アイリス姫君フィールからの命令を受け、セイバーは即座に城を後にした。あつてはならぬ外道を切り伏せるべく、燃える怒りに身を任せて虐殺の場所へと急ぐ。

バーサーカーがここにいることはセイバーにも切嗣にも完全に想定外だった。キャスターを討滅せよ、という老神父の指示があつてからまだ半日しか経っていないというのに、どうやってキャスターの位置を特定できたのか。そも、どのような隠蔽工作を行えばインツベルンの森を埋め尽くす索敵術式や切嗣の監視装置群を突破できたというのか。その手腕には舌を巻くどころの話ではなく、セイバーはバーサーカーのマスターの途方のない優秀さに感嘆し、そしてそれを恨んでいた。

（それだけの見識がありながら、どうしてバーサーカーを解き放つたのだ……！）

子どもたちという人質を有したキャスターにバーサーカーをぶつければ、間違いなく子どもに被害が及ぶ。一方は底知れぬ狂気に染まり、一方は己を律する理性を失っている。どちらとも、子どもの生命を尊重することなど少しも考えていない。身を守る術すら満足に知らない子どもたちが二人の戦いに巻き込まれればどうなるかは、言うまでもない。一刻も早くつかなければ、手遅れになる。

（せめて、せめて一人だけでも生き残っていてくれ……！）

セイバーとて、子どもの死体を見たことがないわけではない。戦場

ではいつも弱い者が先に死ぬ。彼女が騎士として剣を振るった戦場では、いつも小さな骸が横たわっていた。狂気が満ちる戦場では、人はいつでも醜い餓鬼になれてしまう。

だからこそ、『証明』がいるのだ。例えどんな逆境においても、人間は貴く、凛々しく、尊厳を持って立っていられるのだということ。身を帯って示す見本。簡単に地獄に変わる戦場において、弱き者を背に護る勇猛なその後ろ姿で人々に人間としての矜持を思い出させる勇者。

それが『騎士』だ。戦場の華であり、指針であり、手本であり、餓鬼道に墮ちる者の手を掴む最後の希望なのだ。

(それが、騎士としての義務。騎士の王である私の義務だ！)

怒りよりも義務感に背を押され、セイバーは一陣の風となる。

持ち前の豊富な魔力をジェット噴射のように背から噴出し、立ちはだかる木々を紙一重でかわして突き進む。人の尊厳を守るために。騎士の誇りを護るために。

血臭がひときわ濃くなる。何度嗅いでも不快な、戦場の臭い。チリチリと肌を刺す殺気が、戦いの場が近いことを知らせる。そして鼓膜に滑りこんでくる、年端もいかぬ子どもたちの、切羽詰まった甲高い悲鳴。

セイバーの脳裏を過ぎる、かつての凄惨な戦場の光景。犯され、いたぶられ、弄ばれ、父母に助けを求めて泣きながら死んでいった、いたいけな子どもたちの苦しげな死相。

「お母さん」と小さく呟いて事切れた、腕の中の小さな命。

「邪魔だあああああああ！！！！」

ついに焦燥を抑えられなくなったセイバーが前方を塞ぐ大木の群れを斬撃で切り飛ばす。倒れ行く大木を剣風で吹き飛ばし、怒涛の如

き勢いで虐殺の舞台に踏み込む。

次の瞬間、目の前に広がるであろう酸鼻な光景に覚悟を決めて前方を睨み据え、

そこには、『理想の騎士』の漆黒の背中があった。



2 - 3 荒木先生は元新選組副局長（後書き）

最近、短めの更新ばかりですね。次は長めの更新にしたいと思います。

2 - 4 セガールは合気道七段の大師範クラス(前書き)

ハッピーニューイヤー!!!今年もよろしくお願いします!!!

## 2 - 4 セガールは合気道七段の大師範クラス

キキヤスターサイドキ

「思い上がるなよ匹夫めがアアあばばば　　ツツ!？」

苦し紛れに突き出した腕に漆黒の剛腕が静かに絡まり、懐に入られたと認識した瞬間に勢いよく宙に舞い上げられる。2メートル近い長駆を持つために他人に投げ飛ばされた経験などないキヤスターは、突然の空中浮遊からの受身をとることなどできなかつた。凄まじい勢いで背中を地に叩き付けられ、呼吸が強制的に停止させられる。もしもキヤスターが聖杯から日本武術についての知識を授けられていれば、それが合気道の『四方投げ』ということがわかつただろう。合気道を習得した者なら誰もが唸る程の冴え技は明らかに有段者レベルのものであつたが、当然キヤスターは知る由もない。それでも元武人である彼はその巨軀からは想像もできない俊敏さで立ち上がると転がるようにバーサーカーと距離を開ける。バーサーカーは、まるで守護するかのよう子どもたちを背にしてこちらと対峙している。

(い、いつたいどこからわいて来たのだ、この狂獣は!?)

先にも述べたように、キヤスターは元武人だ。かつては祖国を救うためにジャンヌ・ダルクの元で勇猛果敢に剣を振るつた戦士である。バーサーカーの接近ともなればさすがに気付かないはずがない。しかし、実際は腕を掴まれるほどまで近づかれ、利き腕の骨を砕かれた拳句に不思議な技でぶん投げられていた。バーサーカーに隠蔽魔術を行使する理がないことはキヤスターも知っている。ならば、

どうやって近づいてきたのか？  
バーサーカーと対しながらギョロギョロと左右の眼球を忙しく動かして原因を探ると、一つの違和感を見つけた。

（　　子どもの数が、足りない？）

聖処女を覚醒させるために連れてきた生け贄の数は、彼女が処刑された日付に因んで30人を用意した。しかし、バーサーカーの後ろにいるのは29人しかない。周囲を見渡してもやはり一人足りない。

そう、街行く幼児の中でも一際美しく着飾っていた、生け贄に相応しい可憐な少女の姿だけが、ない。

まさか。

「貴様、子に化けていたなッ！？神聖な贄をヲおのれおのれおのれえ　　！！！」

骨身を燃やす憤怒にキャスターが絶叫する。バーサーカーは、子どもに化けてキャスターに近づき、油断したところに襲いかかったのだ。

よりもよって神聖な供物に化け、聖処女を救済するための尊い儀式に薄汚い魂を紛れ込ませるといふ卑怯で愚劣な悪行に、キャスターは自身の髪を引きちぎって怒り狂う。口端から粘性の泡を吹き出す常軌を逸した姿に子どもたちが悲鳴をあげて泣き叫ぶ。

「許さぬ、断じて許しはせぬぞ、汚らしい狗めが！異界の獣に全身を引き裂かれて苦しみ悶え死ぬがいい！！！」

キャスターが自身の宝具『<sup>プレラーティーズ・スヘルブック</sup>螺湮城教本』の装丁に掌を叩きつける。人間の皮肉で造られた分厚い魔導書はキャスターの膨大な魔力の源

であり、クトゥルフ系の魔物を無数に召喚できる凶悪な呪詛宝具である。キャスターの意向を受けた魔導書は邪悪な力を解き放ち、異界との門を開いて闇の中から異形の怪物たちを召喚する。本来ならば、聖処女の魂の鎖を断ち切るために無垢な子ども血肉を贄にして召喚する予定であったが、この魔導書にかかれれば贄がなくとも直接召喚が可能だ。

「殺せ殺せ殺せ殺せ殺せえエエエエエエエエエエ！！」

怨嗟の金切り声が夜気を切り裂き、怪物に鞭を打つ。巨大なイソギンチャクのような異界の化け物が群れを為して一斉にバーサーカーに襲いかかる。

まるで皮を剥ぎ取られた動物のように艶めく皮膚から血潮を吹き出し、もがき苦しむように触手で地面を引っ掻きながら恐るべき速度で這い寄る。

悪意の塊のような造形。巨大な軟体生物のような奇怪な動き。胃液を逆流させる噎せ返るような血臭と瘴気。この世のものとは思えないおぞましい光景に、子どもたちが切羽詰まった甲高い悲鳴をあげる。

バーサーカーは両腕を力強く広げ、地に足を押し付けてその場を動かない。その姿はまるで巨大な城壁だ。断固とした決意が宿る紅蓮の双眸が、「一步も譲らぬ」とばかりに毅然と眼前の化物の群れを睨む。

怪生物の波がバーサーカーに押し寄せる、まさにその瞬間、

「邪魔だあああああああ！！！」

空気を震わす怒声と共に放たれた斬撃が子どもたちの後方の木々を薙ぎ散らし、次いで放たれた剣風が大木の豪雨を怪物の上に降らせた。

『』

『ツツツ!?』

鉄板を爪で引つ掻くような背筋を凍らせるその断末魔を、果たして『声』と呼んでいいものか。怪物たちは突然の大質量に持ちこたえること適わず、薄い皮膚を弾けさせて吐瀉物のような中身をぶちまけた。怪音波にあてられた幼児たちが白目を剥いてその場に昏倒する。まだ無垢な子どもであつたから気絶だけで済んだのだ。成長に伴つて魂に淀みを含んだ大人であれば、己の首を締めて狂死しただろう。

だがこの男にだけは、その断末魔が祝福の鐘音に聞こえた。

「おお……ジャンヌ！！我が聖処女よ！！」

先ほどまでの憤怒はどこへやら、晴れやかに破顔して黄色い声を響かせる。にんまりと顔を歪める彼が熱い視線を送る先には、未だ自分の正体を思い出せぬ嘆かわしき聖処女　セイバーの貴影があつた。当のセイバーは、なぜかバーサーカーの背中を陶醉とも呆然ともとれる表情で凝視していたためキャスターの世迷言は耳に入っていなかったが、そんな些細なことは彼にはお構いなしであつた。これから、嫌でも自分を見詰めさせることになるのだから。

「ようこそジャンヌ、お待ちしておりましたよ！さあ、宴を始めましょう！！オルレアン解放の宴にも勝る、盛大な宴を！！」

嬉々として再び魔導書に掌を押し付ける。濃紺の瘴気が爆発的に溢れ出し、再び怪物を異界から引きずり出す。今度はもつと多く、強く、大きい。こちらを包囲するようにジワジワと這い寄っていく。

「くっ！？キャスター、貴様……！！」

ハツとしてキャスターに向き直ったセイバーが子どもを護るように剣を構える。気絶して動けない幼児がいる以上、セイバーは彼らを背に護って戦うしかない。奇しくも、それはバーサーカーと並び立つ形となった。

視界に入れたくもない獣が、自身が全身全霊の愛を捧げる聖処女の隣に控える。受け入れがたい光景に、キャスターのこめかみに太い血管が浮かぶ。

「思い上がるなよ匹夫めがアアあばばば

ツツ!？」

バーサーカーの強烈な投石が額に命中し、キャスターは再び地に背中を叩きつける羽目になった。

㊦セイバーサイド㊦

かつて、何者にも代えがたい戦友ともがいた。

誰よりも雄々しく勇敢で、誰よりも慈悲深く礼儀正しい、勇猛さと高潔さに満ちた『理想の勇者』。騎士王の常勝を支え続けた『完璧な騎士』。常に弱き者を背にし、強き者に立ち向かうその大きな背中が、戦場の規範であった。

そういえば、彼の鎧もこのような漆黒色をしていた

「ようこそジャンヌ、お待ちしておりましたよ! さあ、宴を始めましょう! オルレアン解放の宴に勝る、盛大な宴を!」

「くっ!?! キャスター、貴様……!?!」

（馬鹿げている！何を考えていたのだ、私は！？）

彼が狂戦士になるなど有り得ない。そのような妄想は非礼極まりないことだ。

この時ばかりは自身の直感スキルの恩恵を全否定したセイバーが小さく頭を振って予感を打ち捨て、化物と子どもたちの間に躍り出る。見れば、先ほどの化物の断末魔の叫びで大半の子どもが気絶してしまっているが、命を落とした者はいないようだ。それどころか怪我をしている者も見当たらない。キャスターとバーサーカーの戦闘に巻き込まれて全滅する、という最悪の結末を予想していたセイバーには嬉しい誤算だった。

だからこそその疑念が彼女の思考を過ぎる。

（なぜ、キャスターは健在なのだ？）

目の前のキャスターは手首がおかしな方向に捻れ曲がっているものの、それ以外の負傷は見当たらない。バーサーカーに至近距離まで近づかれて被害があれだけだというのは不自然だ。接近戦最強のセイバーでさえ防御で手一杯だった苛烈な攻撃をキャスターが余裕で防げる道理はない。

（バーサーカーが、手心を加えた？）

眉根を寄せて、隣に並び立つバーサーカーをチラリと見上げる。昨晩にあれだけの猛攻を加えてきながら、今はこちらを見ようともしない。何より、躍り寄る化物の群れを牽制するようにジリジリと体勢を変える様には狂戦士らしさは微塵も感じられない。手加減をしたのではなく、しなければならなかったのだ。背後の子どもたちを巻き込まないために。

それを察したセイバーの胸に熱いものがこみ上げる。



「思い上がるなよ匹夫めがアアあばば

ツツ!？」

投擲の動作を見せずに放たれた石礫がキャスターの額に吸い込まれるように命中した。もんどり打って吹っ飛ぶキャスターの滑稽な姿を前に、セイバーの口元に笑みが浮かぶ。それはキャスターの道化のような醜態を笑ったのではなく、『弱きを助け強きを挫く』という信条を他者と共有できる幸福を喜んだものだった。子ども守護という行動がマスターによる指令なのか、それともバーサーカーの勝手な判断なのかは定かではないが、どちらでもよかった。聖杯を競い合う敵が「正義の何たるか」を識ってくれているというだけで、セイバーは満足だった。

ぞる、と滑るような動きで触手の怪魔の群れがまた一步詰め寄る。数にして100は下らないだろう。今も端から増え続けている。一体一体は脆弱で低能な化物にしか過ぎずとも、数を成せば十分な脅威だ。さらに、こちらには子どもというハンデがある。派手に動き回ることはおろか、回避行動すら制限される。受身になった時点で劣勢になることは火を見るより明らかだ。どうにかして先手を取り、イニシアチブを手に入れなければ勝利はない。

再び怪魔の波が近づく。こちらを包囲する輪がさらに狭まり、状況は一触即発の状況にまで逼迫していく。思わず後ずさった背中が、堅牢な何かとぶつかる。気配で、それがバーサーカーの背中ということがわかった。

苦手な敵のはずなのに、なぜかしっくりと肌に馴染む。いつもこうして背中を合わせていたかのような既視感さえしてくる。気づけば、

「……バーサーカー、」

問っていた。

「風を踏んで走れるか？」

セイバーの謎めいた質問に、バーサーカーは言葉を持って応えない。しかし、引き絞られた矢のように姿勢を低く構える様は、即ち『了承』の意味である。同じ『騎士』の間に、言葉は必要ない。

刹那、セイバーは漆黒の兜の下に不敵な微笑を錯視する。その微笑が彼と重なった瞬間、セイバーの躊躇いは消えた。

「いつつ……。さあ、恐怖なさい、絶望なさい、ジャンヌ！武功の程度だけで覆せる“数の差”には限度というものがある。ウッフ、屈辱的でしょう？栄えもなければ誉れもない魍魎たちに、押し潰され、窒息して果てるのです！英雄にとってこれほどの恥はありますまい！」

額を抑えるキャスターのさも愉快気な嘲笑を浴びせられても、セイバーは激せず、怯まず、ただ決然と静かな面持ちで剣を振り上げる。揺るぎない眼差しが見据えるのは、ただ　　掴み取るべき勝利のみ。

「ウフツ！その麗しき顔を……今こそ悲痛に歪ませておくれ、ジャンヌ！」

『ギイイイイツ！！』

怪魔の群れが一齐に吠える。歓喜とも憎悪ともつかぬ異形の奇声を張り上げながら、包囲の中心めがけて殺到する。

今こそ　　勝負の時。

騎士王は高らかに、その誇り高き聖剣に一命を下す。

「ストライク・エア  
風王鉄槌

「ツツ！！！」

聖なる宝剣を守る超高压縮の気圧の束

風王結界の変則使用。  
インヒジブル・エア

凝縮された竜巻を一点に収束・解放させるといふ荒技は、この世の条理では有り得ない大破壊を生み出す。見えざる巨人の手が唸りを上げて大地を薙ぎ払うが如く、居並ぶ怪魔の壁がごっそりと削り取られ、キャスターへと続く巨大な穴を貫通させる。

だが、すでに300を超えていた怪魔の圧倒的な数を前にしては、豪風の破城槌の攻撃力も霞んでしまう。怪魔たちは包圍網の形成を一旦やめ、主君を守らんと急速に密集する。

「ひ、ひいいいいいつ!?!」

にも拘らずキャスターが恐怖の叫びをあげたのは、包圍を穿った風穴を戦車が驀進してくるからだ。

「行けッ!!バーサーカー!!」

「グルルラアアアアアア!!!!」

子どもという枷から外れた狂戦士バーサーカーが激怒の雄叫びを上げながらキャスターに向かって突進してゆく。道を阻む怪魔を跳ね飛ばし、踏み潰し、引き千切り、太古の恐竜の如く獲物に向かって全速力で突き進む。バーサーカーの膂力ストライク・エアに風王鉄槌による速度が付加された今、彼はまさに『戦車』と呼ぶに相応しい破壊力をその身に宿してキャスターに肉薄する。

キャスターは召喚していた全ての怪魔を自身の防衛に呼び戻すが、決定的に間に合わない。

眼前まで迫った怒りに滾る双眸に総身を貫かれ、キャスターが喉奥から悲鳴を搾り出す。

「ほわああああああああつ!!!??」

次の瞬間、双腕を震わす衝撃。思わず己の身を守ろうと持ち上げた  
螺湮城教本にガントレットの鋭い爪が深々と突き刺さった。漆黒の  
爪先がキヤスターの眼球の鼻先で止まる。分厚い魔導書はほんの僅  
かな差でキヤスターの命を助けたのだ。

「……ひ、ひははっ、ひやはははははっ！やはり、やはり神は私を  
罰しない！狂犬の爪など、私に届きはしないっ！！！」

引き攣った笑い声は、直ぐ様嘲笑に取って代わる。

あと一步のところ、バーサーカーの攻撃はキヤスターに届かなか  
った。主君の窮地に集まった怪魔の壁は見事バーサーカーの突撃の  
威力を弱めることに成功したのだ。異界の獣が怒りに震えるように  
ブルブルと皮膚を震わせる。キヤスターは自らの勝利を確信した。  
怪魔たちが同士討ちを始めるまでは。

『ギイイイイツ！？』

「は、あ？」

鋭く尖らせた触手と触手が擦過し、互いに血の花を咲かせる。あり  
えない箇所が生えた牙が仲間の頭を噛み千切り、反撃に繰り出され  
た触手の鞭が胴を抉る。地を埋め尽くしていた怪魔が次々と倒れ、  
ドロリと融解して物言わぬ鮮血と成り果てる。

それは暴走ではない。螺湮城教本からの『自滅せよ』という指令に  
忠実に従ったのだ。

そこで初めて、手元の魔道書の制御が自分から切り離されているこ  
とに気付く。

装丁の表面に走る、黒い葉脈。それがあたかもコンピュータをハッ  
キングするかのように魔道書の制御権をキヤスターから強制的に剥  
奪していた。葉脈の根は、漆黒の爪。魔導書を隔ててこちらを見据

える紅蓮の双眸が、不敵に笑う。

バーサーカーの狙いは最初からキャスターではなく、皮肉にも彼が防御に繰り出した魔導書だったのだ。

「貴様ツ

キサマ貴様キサマ貴様キサマキサマキサマアアツ

！！」

喚き散らして魔道書の制御権を奪還しようとする魔力を巡らすが、その間にも怪魔の数は減る一方だ。元々魔術の心得がないジル・ド・レエが邪悪な魔術を行使できるのは、ブレイク・スヘルブック螺湮城教本を所有するが故である。それを奪われれば彼はただの精神異常者だ。最後の一匹が自らの頭を刺し貫いて生き絶えた時、キャスターの命運は尽きる。

「いいや、その前に私が貴様を斬る」

真横から叩き付けられる、鋭い決定の声。視線を翻した先には、振り上げられた黄金の聖剣があった。刀身を滑るように持ち手に目を向ければ、輝く白銀と紺碧の甲冑に身を包む、見目麗しき騎士王の美貌。

（ああ、やはり貴女は聖処女ジャンヌに他ならぬ。だって、貴女は  
）

自身に向かって振り下ろされる聖剣を、キャスターは恍惚として見守る。切っ先が己の身体を切り裂いてなお、その陶然とした笑みは崩れない。彼の瞳に映るのは、かつて『救国の英雄』ジルと共に戦場を駆け抜けた美しき戦乙女の微笑みだ。

（こんなに、美しいのだから）

その瘦躯が地に触れることはなく、キヤスターは呆気なく消滅した。

「……終わった、か」

刀身にへばり着いたどす黒い血液を振り払い、セイバーが小さく息を吐く。未だバーサーカーが近くにいるというのにその仕草は隙だらけであったが、不思議と彼がその隙に浸け込むことはないと感じていた。

そうだ、彼なら決してそのような卑怯な真似はしない。

「グルル……」

「ま、待て、バーサーカー」

劣るように小さく唸ると、バーサーカーは静かに具現化を解く。霊体化する際、チラリと子どもたちの無事を確認する僅かな所作を見せたことをセイバーは見逃さなかった。その『理想の勇者』の姿に、セイバーは思わず制止の声を上げる。

どうしても確かめなければならなかった。練武の冴えが、黒鉄に輝く鎧が、狂化しても失われぬ騎士道精神が、『完璧な騎士』と重なったからだ。

「バーサーカー、貴様は……いや、貴方はまさか」

「hinnnyuu」

「前言撤回だ。今ここで持って貴様もたたつ斬る！そこへ直れ、貧乳差別主義者め！！」

やはり勘違いだったのだと一瞬前の自分を恥じ、セイバーは聖剣を振り乱す。それをヒョイと躲したバーサーカーが消える直前にボソ

リと呟く。

「princess」

「は？」

意味不明な呟きにセイバーの思考が一瞬途絶える。その隙にバーサーカーはスタコラサツサしてしまった。

（プリンセス……『姫君』？）

姫君と言えば、セイバーの脳裏に思い浮かぶのは生前の自分の妻か、自分の仮のマスターであるアイリスフィールのみだが。

（ッ！？）

刹那、セイバーの額を一陣の閃光が貫いた。

「アイリスフィールが危ない！？                   君たちはここでじっとして  
いなさい！」

「う、うん。わかった」

ランクAを誇る、未来予知に匹敵するセイバーの鋭敏な直感スキル  
アイリスフィール  
が姫君の窮地を知らせたのだ。

唯一、まだ意識のある赤みがかった髪の少年に待機を告げると、踵  
を返して忠誠を誓った女性の元へ駆け出した。

† 綺礼サイド †

『我が主、どうか撤退を。キャスターが討滅されました』

『なに？』

アサシンの緊張を孕んだ報告が滑りこんできたのは、足元に転がる衛宮切嗣の配下の女に止めを刺そうと脚を振りかぶったまさにその時だった。

憎々しげにこちらを睨め上げる女を油断せず視界に入れながら、綺礼はコンマ数秒だけ混乱する。

キャスターが人質を持ってインツベルンの森に攻め入り、セイバーが単独で迎撃に向かったというアサシンの報告を受け、これで衛宮切嗣との邂逅を果たせると西側から城を目指した。途中でインツベルンのマスターとその護衛の女に襲撃され、撃退したのがつい先ほどのことだ。

いかに白兵戦最強のセイバーとは言え、見るからに正義感の強い騎士王が人質の活用方法を熟知しているキャスターを瞬時に切り伏せられたとは思えない。必ず一悶着あるに違いないと踏んだからこそ、綺礼は単独でここまで侵入したのだ。

『早いな。何があった？』

『バーサーカーが参戦したのです。人質の幼児を全員護り、セイバーと共闘してキャスターを殺し、先程撤退しました』

『な……！？』

『ッ！我が主、お早く！セイバーが高速でこちらに向かってきます』

思いがけない乱入者の名前とそれがもたらした結果にガツンと思考が揺さぶられる。アサシンの必死の懇願に急ぎ立てられるように身を翻し、振り向きざまにインツベルンのマスターの腹部と足に黒鍵を投擲する。



「きゃあっ！」

黒鍵は音もなく白い身体を貫き、女の膝を屈させた。死なないように位置を調節した上での攻撃だ。これで時間稼ぎが出来る。英霊が相手となつてはさすがの代行者も勝ち目は無い。

全速力でその場を後にしながら、綺礼は事態を整理せんと頭をフル回転させていた。

（人質を全員護りきつた？セイバーと共闘させてキャスターを倒した？しかも、セイバーとの戦闘はせずにさっさと撤退した？あり得ん。間桐雁夜は、そんなつまらない人間ではなかったはずだ。奴はもつと歪んで、鬱屈としていなければならぬ。このような展開は、まったくもっておもしろくない）

「おもしろくない、だと？」

自身の内心の愚痴に愕然として立ち止まる。今まで『愉悦』とは何たるかを探し続けていた自分が、ごく自然に「つまらない」と呟いた。間桐雁夜について仔細をアサシンに調べさせ、バーサーカーを召喚するに至った経緯を知った。その絶望と苦悩から推測していた間桐雁夜の行動と、今回のバーサーカーの行動は、まったく相入れぬものだった。綺礼はそれを「おもしろくない」と思った。

それはつまり　綺礼が『愉悦』とは何たるかを自覚しかけているという証左に他ならない。

（『愉悦』というのはな、言うなれば魂の形だ。“有る”か“無い”かではなく、“識る”か“識れない”かを問うべきものだ。綺礼、お前は未だ魂の在り方が見えていない。愉悦を持ち合わせんなどと抜かすのは、要するにそういうことだ）

ギルガメツシュの不愉快で理解不能な説法が、やけに生々しく脳裏に再生された。この世の愉悦を知り尽くした英雄王の言葉の意味を、綺礼は少しずつ理解し始めていた。

「セイバーサイド」

「もう大丈夫。心配いらないわ。他人の怪我に治癒魔術をかけるより、自分の傷を治すほうが簡単なのよ。……そもそも私、人間とは身体の作りが違うから」

「はあ……」

「もうすぐ切嗣が来てくれるわ。それまでに舞弥さんの傷を出きるだけ治さないと。手伝って、セイバー。私、ちょっと手に力が入らないの」

「はい、アイリスフィール」

アイリスフィールが『ホムンクルス』と呼ばれる人工生命の一種であることは知っていたが、ここまで尋常でない機能を持っているとは思っていなかっただけに、セイバーの驚きはかなりのものだった。本当はエクスカリバーの鞘である『アヴァロン全て遠き理想郷』を体内に封入しているが故の超回復力なのだが、そのことをセイバーは知る由もない。

「マダム、申し訳ありません。不覚を取りました……」

「いいの。あの化け物を相手に生き残っただけでも立派な勝利よ。

次は勝ちましょう、舞弥さん」

「はい、必ず」

舞弥は身体中の骨を折る重傷だが、意識はハッキリとしている。命に別状はないだろう。もう少し早く自分が窮地を察知できればこのような事態は防げただろうが……バーサーカーが『姫君』というヒントを与えてくれなければそもそも気づかなかったかもしれない。悔しさに思わず歯噛みする。

（ 待て。何かが、おかしい ）

セイバーがある違和感に気がつくのと、視界の隅でロングコートが翻るのは同時だった。

「アイリスフィール、無事か!？」

「切嗣！私は無事よ。でも舞弥さんが……」

「すいません。言峰綺礼に遭遇し、敗北しました」

「言峰、綺礼……」

切嗣が絶句する。空虚で恐ろしい敵が自分を狙ってきたことに恐怖し、戦慄する。

「マスター、報告したいことがあります。無論、今まで通り無視したままで構いません。しかし、お耳に入れて頂かなければならないことです」

「セイバー？どうしたの？」

「……」

突然のセイバーの申し出に、三者三様の顔で訝しむ。さしもの切嗣も怪訝な顔でセイバーを見やる。「これ以上面倒事を持ちかけるな」という威嚇の目線に、セイバーは物怖じせず告げる。切嗣には気の毒だが、事態はもっと深刻だということを知ってもらわなくてはならない。

「バーサーカーのマスターは、アイリスフィールが私のマスターでないことを知っている」

「……な……!?!?!」

「目的は定かではありませんが、バーサーカーが霊体化する直前、私に『姫君』と言ってアイリスフィールの窮地を教えました。『マスター』ではありません。バーサーカー陣営は、我々の『アイリスフィールを私のマスターと思わせる』という目論見を看破しているのではないのでしょうか」

セイバーの説明に切嗣の目が全開に見開かれる。見破られるような失態は何一つ犯していない。それを、直接会ったこともないバーサーカーのマスターがすでに見通し、バーサーカーを介してマスターでもない女の危機を警告させたというのだ。

間桐は『始まりの御三家』の一つでもある。アイリスフィールが聖杯の母体となることも知っていておかしくはない。それを踏まえ、間桐雁夜はアイリスフィールを保護させたのだ。

なんとという知略だろう。なんとという余裕だろう。

衛宮切嗣は、『恒久的な世界平和』という生涯の願いを叶える機会を前に、最悪の強敵を同時に二人も相手にしなければならなくなっただのだ。

「……セイバー」

「はい、マスター」

何かを決意したように顔を上げた切嗣が、初めてセイバーに話しかけた。セイバーは静かに応える。

「事情が変わった。君と僕とでは信念も理想も価値観も何もかも違う。だが、協力はすべきだ。違うか？」

「いいえ、仰る通りです。例え相入れずとも、我々は協力しなければならぬ。そうしなければ、此度の戦争を勝ち抜けない」

「ああ、そうだ。……改めて、これからよろしく頼む。騎士王」

「こちらこそ。これからもこの身はあなたの剣となり、盾となる。共に勝ち抜きましょう、切嗣」

互いを決して理解できない人間と知りながらも、二人は固い握手を交わした。間桐雁夜バーサーカー陣営という強大な敵を前にして、結束が不可欠であると悟ったのだ。

見つめ合う両者を、アイリスフィールと舞弥は笑顔で見守る。聖杯戦争二日目にしてようやく、セイバー陣営は完全な協力体制を構築するに至ったのだった。

キバーサーカーサイドキ

なんか貧乳アホ毛ちゃんがうつとりした顔で「貴方は……」とか言ってきたので思わず「貧乳！」とからかったらすつごい怒られました。キヤスターをけっこう簡単に倒せたからちよつと調子に乗っちゃっただけなんだよ。そんなに怒ることないじゃない。そんな器量が小さいから反乱起こされるんだよ！

とりあえず、今頃アイリスフィールがピンチだろうからそっちに行ってもらおうようにしました。人妻巨乳美人がピンチとあれば本当は俺が駆けつけたかったんだけど、敵だからそういうわけにもいかなしいしね。これからもう一つ大事な仕事も残ってるわけだし。

それにしても、変装作戦は大成功だったね。人質の子どもに混じって、セイバーと共闘できるくらいのタイミングで変装を解いてボコってやりましたよ。俺一人で暴れると子どもを巻き込んだじゃいそうだから、人手が欲しかったんだよね。セイバーならその辺は任せら

れるし。合気道の有段者資格もとってて良かったぜ。いつ何が役立つかわからんね、ほんと。

子どももみんな無傷だし、巨大な妖魔が召喚されることもなくなつたから、今のところは言うこと無いね。セイバーもライダーも最強宝具の力がその分節約できるから、ギルガメッシュとの対決の際にはより精強な状態で戦いを挑めることでしょう。頑張つて欲しいものです。

さーて、それじゃあ、お次はシリアルキラーな人間殺人マシーンを簞巻きにしてやりに行きますか！！

さて、ここで一人の少年の話をしよう。

その赤みがかった髪……の少年は、キャスターに殺される寸前、すんでのところ……でバーサーカーに助けられた。

その後、彼は他の子どもたちと同様に、一旦アインツベルン城に収容され、嚴重に記憶消去と封印の処置を施されて家に帰された。

だが、彼の魂に刻まれた背中は決して消えることはなかった。

自分たちのような弱いものを背に護り、邪悪で圧倒的な存在に勇敢に立ち向かう大きく偉大な背中は、心の無意識の部分にしかと刻みつけられていたのだ。

少年は知らずの内に、その背中を目標とし、夢とした。

無限の選択肢を持ちながら、まだ幼いはずの少年はその背中へ続く道のみを歩み始めた。

それ即ち 『正義の味方』 への道である。

かくして、少年は後に人類を救済する英雄となるのだが、その話はまた後日に語ろう。

2 - 4 セガールは合気道七段の大師範クラス(後書き)

眠い！もうダメ！死ぬ！オヤスミなさい！



2・5 うわよう、よつよい（前書き）

0時かそれをよつと過ぎた頃に更新すると言ったな？あれは嘘だ。

すみません、あまりの眠気に少しノックダウンされてました。目がいてえ。前が見えねえ。仕事って辛いな、サム。

今回、書いた後に気がついたんですが、ウェイバーとライダーがキヤスター工房に駆けつける時期が一日早くなってます（多分）。小説を読み返していてなんか違和感があるなと思っていたらそんな感じでした。原作よりかなり早くサーヴァントが二体も脱落しているので、展開も早くなっているんだとご都合的に考えて下さいませませ。

次回の更新も遅くなりそうです。ポチポチやってきます。

±龍之介サイド±

「ダンナの霊圧が……消えた……!?」

下水道の最奥部、地表からの雨水を一時的に貯留するための広大な空間で、唐突に身を貫いた喪失感に、雨竜龍之介が目を見開いて呻いた。

「なーんて、んなはずないかあ。ダンナが死ぬなんて想像できねえし」

龍之介は正式なマスターではない。聖杯戦争どころか魔術への知識すらつい数日前まで皆無だった素人だ。全能の願望機を掛けた凄絶な闘いも、せいぜい『とてもクールで刺激的な遊戯』程度にしか考えていない。だから、自身の手から令呪が消えた意味　サーヴアントの消滅にも気づかなかった。

そもそも、今はそんな些細なことなど問題にしてはられない切迫した状況なのだ。

(さあてさて、どうしたもんかなあ、これ)

頬を掻く龍之介の目の前には、冷たい壁を背にして怯え竦む数十人もの子供たちの姿があった。彼らは全て、ある崇高で傑作的な創作のために収集された素敵な“材料”たちだ。

質の良いものを厳選し、それなりに数を集めることは大変な苦労が必要だったが、それも完成時の湧き立つ歓喜を想像すれば苦ではな

かった。“青ひげのダンナ”によって『大勢の子どもを仮死状態にして完璧に保存しておく』という夢のような方法が実現できたことで、創作の幅は多いに拡がり、壮大なモノへと昇華された。当初の予定は人間オルガンの製作であったが、今考えればそんなものは小さい小さい。せつかなのだから、もっと大きく荘厳なものを創るべきだ。命の尊さ、素晴らしさ、苛烈さ、生々しさ　人間讃歌をでっかく表現する、超クールな楽器を誕生させるのだ！

「そう、人間パイプオルガンだ！！」

叫び声に子どもたちがビクリと肩を跳ね上げる。その様子に、龍之介はがつくりと肩を落として意気消沈する。

「でも、なんでみんな目を覚ましちゃうんだらうなあ。これじゃあ、パイプオルガン製作スケジュールは全部ペアだよ」

龍之介は、人間パイプオルガン製作のために今まで人殺しをずっと我慢して材料集めに四苦八苦してきた。巨大なパイプオルガンの材料を全て子どもに変えるのだから、当然、必要数はかなりのものになる。無駄に消費するわけには行かず、龍之介とキヤスターは子どもを攫つて来ては仮死状態にして保存し、下水道の奥にずらりと並べていた。

まだ赤ん坊の張りを残す艶めく肌、男にも女にもなりきれしていない中性的な骨肉、何よりこの世の不条理を知らない無垢な魂。それらが一つに集合し、楽器へと生まれ変わった時、それが奏でる音色は果たしてどれほどの感動を聞く者の心に呼び覚まさせるのか。きつと想像もできないほどの衝撃に違いない。街中を探しまわって60人ほど厳選し終わった時に流した汗は実に爽やかなものだった。キヤスターがそこから30人を連れて行くと言い出した時には思わず涙を流して思い留まるように説得したほどだ（結局連れていかれて

しまったが)。

だが、それから間もなくして、キャスターが魔術で仮死状態にしていたはずの子どもたちが突然覚醒したのだ。一人づつ目覚めさせ、ゆっくりと解体しながらたっぷり時間をかけてじっくりとパイプオルガンの製作に取り掛かろうと考えていた龍之介は非常に焦った。術を解いたキャスターの真意はわからないが、もしもこのまま仮死状態に戻らなかつたらスケジュールはとてハードなものになってしまう。焦ってモノ創りを行うと大抵駄作になってしまうことを経験で理解している龍之介は頭を抱えた。

「み、みんな、大丈夫よ。コトネもみんなも、私が守ってみせるから……っ」

「り、凜ちゃん……」

「うん？」

搾り出すような細かい声で、一人の少女が龍之介の前に立ちほだかった。長いツインテールを揺らす、美貌の少女だ。勝気そうな瞳は今にも泣き出しそうで、それでも強い覚悟の色を失わない。夜中に街中を彷徨っていたところを偶然拾ったのでつきりそこの家出娘かと思っていたが、どうやらたった一人で友だちを助けに来たらしい。その高潔な魂はきつと宝石のように美しいに違いない。

思わぬ収穫に龍之介の顔面から不安が吹っ飛び、満面の笑みに取って代わられる。

「へえ！こりゃあ、いい拾い物しちゃったかな。こういうのなんて言うんだっけ？棚ぼた？よくわかんねえけど、カミサマは俺のことを見捨ててなかつたってわけだ！んー……決めた！君はオルガンの飾りにしようー！！」

「ひっ……」

自身を値踏みし、吟味する狂気の視線に貫かれ、少女の足がガクガクと震えだす。もはや自分は助からず、生きて家に帰ることはなく、それどころか生きながらに恐ろしいナニカに加工されることを理解して、少女の顔が絶望に染まってゆく。

龍之介が一步詰め寄ると、ついに少女はぺたんと尻餅をついて後ずさる。己の末路を自覚して淀んだ瞳に浮かぶ涙が、宝石のように美しい。この僥倖には青ひげのダンナもきつと大喜びするだろう。

他の子どもを失ってもこの少女だけは確保しておこうと壊れ物に触れるようにゆっくりと手を伸ばし、

「うおっ!?!」

ぐいと背後から服の裾を引っ張られてタタラを踏んだ。引っ張られる位置からして子どももくらの背丈だろうが、それにしても力が強い。おそろおそろ振り返る。

「……わーお。今日はすげえ良い日だ。罰が当たりそう」

こちらの少女もまた美しかった。どことなく凜と呼ばれた少女と似通った容貌をしてはいるが、勝気さとは対照的な大人しげな雰囲気を持つている。可憐な美貌は美しく着飾っていることでさらに高まり、首筋から香り立つ蠱惑的な香水の匂いも強すぎず弱すぎず、素晴らしいエッセンスとなっている。この匂いはランバンマリーのオードパルフラムだろう。年齢に似合わない大人びたお洒落が、まるで好きな男の子のために必死に背伸びをしているようで、とても愛らしく微笑ましい。紅く輝く双眸も、まるで誘っているかのようだ。

「さ、桜!?!どうしてここに!?!」

あっ!?!」

少女が身を乗り出して叫ぶのを龍之介は見逃さなかった。さらに愉

悦に歪む狂人の表情を見て少女が慌てて口を抑えるが、すでに遅い。

「ふーん。そつくりだなと思っただけど、姉妹だったのか。これは運命だね！カミサマから俺へのご褒美だ！」

「お、お願い！妹だけは助けて！何もしないで！」

「だーめ！君たち二人はパイプオルガンの両端を飾るんだから！もう決めたんだ！」

「そんな……。ごめん、ごめんね桜。助けてあげられなくてごめんね……」

いい台詞だ。感動的だな。だが無意味だ。龍之介の狂気の前では、幼い姉妹愛など創作熱意の後押しにしかならない。とりあえず、姉の方から出来る限りの保存処理をしようと歩を進め　　られない。

「……ねえ、君、なんでそんなに力が強いの？」

裾を握る小さな手はびくともしなかった。引つ張ろうが身を揺らそうが、一向に揺らぐ気配はない。今度はか細い腕を無理やり引き剥がそうと力を込めるが、まるで歯がたたない。それどころか爪を立てても皮膚に食い込むことすら出来ない。

一見するとヤサ男に見える龍之介だが、伊達に人間を苦もなく何十人も殺したり、警察から逃げ続けているわけではない。服の下には引き締められた筋肉と運動神経を備えている。

だというのに、少女は必死の抵抗にも微動だにせず、じつと龍之介を見上げている。その無表情に、まるで極太の支柱に縛り付けられているかのような感覚を覚えてゾツとする。

（ていうか、こんな娘攫ってたっけ？）

まったく身に覚えがない。こんな可憐で美しい素材は忘れるはずが

ない。迷いこんできたのかとも思ったが、下水道の奥にこんな少女が来るはずもない。それに、通路はダンナの使い魔で埋め尽くされていたはずだ。姉を探しに来たにしても、途中で食い殺されていなければおかしい。

( なんなんだよ、コレは )

恐怖も怒りも絶望も宿していない、ただ紅蓮に燃える双眸に射られ、龍之介は生まれて初めて他者を“不気味”だと思った。

「ね、ねえ。黙ってないでさ、ナニか言いなよ。な？」

「ぐるる」

「ぐ、ぐるる？ま、まあいいか！」

予想していた言葉とはまったく異なるものだったが、それでも反応が返ってきたのは安心だ。相手が同じ人間だとわかれば怖いものはない。龍之介以上に人間を探求し、知り尽くしている者はいないのだから。

そう、相手が人間ならよかったのだが。

「グルルルル……」

「……え？」

雷鳴のように腹底を揺らす低い唸り声。肉食獣のようなその声が少女の口から発せられたと理解するのにはだいぶ時間を要した。

忘我する龍之介の眼前で、黒い濃霧の竜巻を身に纏い、その中で質量を増大させてゆく何者かが少女の皮を脱ぎ捨ててゆっくりと身を起す。

長身の龍之介をして首が痛くなるほどに見上げなければならぬ背丈のソレは、つい昨夜にダンナの水晶玉で垣間見た、漆黒のサーヴ

アント。

ジャーンジャーン!!

「ゲエーっ! バーサーカー!!」

ひでぶっ!?!」

ばっちーん!と小気味よい音が響かせ、強烈なビンタが龍之介の頭蓋を揺らした。顔面下部をクリーンヒットしたビンタは頭蓋骨の中で脳みそをシェイクさせ、龍之介から正常な思考能力を呆気なく奪い去る。剣山で殴られたような激痛に視界が明滅し、立つことも儘ならない。ふらりと倒れかけたところへ、さらに腕に激痛が走る。剛腕が流れるように龍之介の腕に絡まったかと思いきや、無理やり背中に捻り上げる。

「があああ!!」

それ以上いけないと言ってしまいそうな華麗なアームロックに強制的に意識を覚醒させられ、たまらず悲鳴をあげる。人間の域を越えた怪力に、腕と肘と肩がミシミシパキパキと不協和音を鳴らす。しかも絶望的なことに怪力にはまだまだ余裕がある。その証拠にちよつと抵抗する素振りを見せると、

バギリ

「痛っイイ!お……折れるう……!!」

すでに折られているのだが、そう言わなければいけない気がした。赤と黒に明滅してブラックアウト寸前の思考で、人間の構造を知り尽くした龍之介は今のは下腕の尺骨が折れた音だと瞬時に聞き分け。それは腕の骨でもっとも固く、ダメージを負った際にもっとも痛みを感じる骨だ。この化物は、狙って折った。



「てめえ、いつたい　　うわらば!!」

視界の死角から放たれたハンマーのような左フックが横腹を直撃し、人間の急所の一つ　　肝臓を貫いた。プロボクサーもかくやと言うべき全体重が載せられたパンチは、食らう側から見ても見事なものだった。今までの痛みなど足元にも及ばない生命活動を阻害するレベルの激痛に、龍之介の身体が強制的に海老反りに硬直する。次いで襲い来る、激しい呼吸困難。金魚のように口をパクパクと開くが、麻痺した内臓は機能せず、酸素が入ってこない。

(コレが、狂<sup>バクサー</sup>戦士だつて？ハハ、冗談じゃない。コレは狂つてなんかない)

消える寸前の意識の中、本物の狂人である龍之介は周囲の認識を嘲笑う。狂気の申し子である自分だからこそ、ひしひしと感じ取れる。コレは、狂気からもっとも遠いところにあるモノだ。狂獣の皮を被った冷徹の戦士だ。

「それって、超、クールじゃん……」

灼熱の眼光に睨み据えられながら、龍之介は意識を手放した。

±バクサーカーサイド±

ボクシング習っててよかったね。興味本位でアマチュアボクシングやってただけど、まさか夢の中で成果を披露することになるとは思わなんだ。持っててよかったミドル級！今度久しぶりにジムに差

し入れ持って行こうかな。でも俺が差し入れ持つてくと減量中のボクサーを太らせちゃうから後で怒られるんだよなあ。

そんなことを考えながら、死なない程度にフルボッコにしたシリアルキラーさんをよいしょと放り投げると、なんか壁のほうで子どもたちがビクビクしました。うーん、怖がらせてしまったかもしれん。トラウマになっちゃわないか心配だなあ。なんか愉快なダンスでも踊って場を和ませたほうがいいだろうか？

「さ、桜……？」

見下げれば、幼女凜ちゃんですよ。まだ小さいね。原作ではコトネちゃんを探しに来たあたりで気絶して雁夜おじさんに助けられるんだけど、どうやらここに連れてこられたみたいだ。殺されてなくて何よりです。急いで駆けつけて正解だったね。子どももみんな無事そうだし。人間パイプオルガンのために溜めておいたってわけだね。これも夢補正だろうか。

「ちよつと見ない内に立派に育ったわね。お姉ちゃん参っちゃったわ、あははははは　　きゆう」

ボタンキューしちゃいました。まあ、目の前で妹が巨大な全身鎧に変身したら誰だってそうなる。俺だってそうなる。分かりにくいかも知れないけどジョジョネタだよ！

おお？なんか雷の音がする。あれはライダーのゴルディアス・ホイールじゃないか？展開が早いな。鉢合わせすると色々まずいので、他の出入り口から出ることにします。ここで戦力を消耗するのは互いにとってよくないからね。この下水道の構造だと、だいたいあの辺に通用口を設けるだろうな。お、あつたあつた。ふはは、1級土木施工管理技士資格は伊達ではないのだよ。

遠坂ママが探してるだろうし、雁屋おじさんのイベントもあるから、

凜ちゃんだけは連れていくことにします。他の子は申し訳ないけどもう少しここで待っててもらおう。

そうそう、リアルキラーさんは簀巻きにして交番の前に放り投げとくことにします。お巡りさん、後はよろしくね!!

キウエイバーサイドキ

「どうやら、キャスター討滅は先を越されたらしいな」

「チクシヨウ、チクシヨウ……せっかく根城まで突き止めたっついでうのに」

大急ぎで魔術的な実験で川の水を探ってキャスターの工房を発見し、ゴルディアス・ホイール神威の車輪で乗り込んだのがつい先ほどだ。さあどんな防御結界や迎撃魔術が敷かれているのかと覚悟を決めて強襲してみれば、そこは魔術の痕跡が散見されるだけの伽藍堂な空間だった。この残滓は、唐突に魔力と魔術制御が途切れた際のパターンだ。ライダーもそれを感覚で感じ取っているらしい。つまりが、自分たちがここにたどり着いたとほぼ同じタイミングで、どこぞの陣営がキャスター陣営を討伐したのだ。

「ま、こういうこともあるさ。余は坊主が成果を見せただけで満足よ。人攫いなんぞの首級をとっても楽しくないしな。で、坊主。この小童たちはどうするのだ？」

ライダーが振り返る先には、ゴルディアス・ホイール神威の車輪の荷台に当る部分に詰め込まれている少年少女たちがいる。とりあえず全員を眠らせているが、記憶の部分消去などという高度な魔術まではウェイバーは出来ない。

「教会に連れていこう。そこで保護してもらえばいいさ」

「うむ、あいわかった。ところで、だ」

「ああ、わかつてる。　　バーサーカーだ」

空气中に漂う邪悪な魔力に混じる、特徴的な魔力の波動。ウェイバーにも、その黒い霧がどのサーヴァントの魔力残滓かは嫌でも判別できる。

「ついさっきまで、ここにバーサーカーがいたんだ。マスターを狙ったんだろうな」

「そして、その目論見は成功した、というわけだな。残った小童は後から駆けつけてきた我らに丸投げというわけか。ふむ、敵もなかなか策士よな」

「褒めてる場合かよ。後処理を押し付けられたんだぞ」

「ふふん、相手が強ければ強いほど腕がなるといふものだ。ハアッ  
！！」

「……そういうものか」

傲岸不遜に笑いながら手綱を鳴らすライダーを横目に、確かにそうかもしれないとウェイバーは心中に呟いた。

バーサーカーという爆弾が放たれたというのに、下水道には破壊の跡もなく、子どもたちにも一切の怪我はない。マスターが無益な被害を抑えたということだ。キャスター陣営をこれほど早急に討伐できたということは、もしかしたら教会が感づく前からキャスター陣営を危険視し、その居所を探っていたのかも知れない。

強大であると同時に、正義感と倫理観も兼ね備えた強敵　　。

(相手にとって不足なし、ってことかな)

敵にまわすのにこれほど相応しい相手はいない。この敵に立ち向か

って倒れても、きっと悔いはない。  
ウェイバーは生まれて初めて、武者震いに身を震わせた。

「うーむ。しつかし、せつかく意気込んで来たというのに拍子抜けでスツキリせんなあ。ここは一つ、パーツと盛大に飲み明かしてみたいもだが　　おお、そうだ！」

「……おいイ？」

ぼむ、と心得顔で手を打ち鳴らすライダーに、ウェイバーの精神がストレスでマツハとなった。

±雁夜おじさんサイド±

「……そこにいるのは、誰？」

想い人の固い声には、明らかに警戒と敵意の色が見て取れた。そんな声が欲しくてこの戦争に参加したわけではないのに。

心を揺らす衝動をぐっと沈め、雁夜はゆっくりと街灯の光の下に姿を現す。ゾンビのような醜い顔を見られないように、ぶかぶかのウインドブレーカーを目深に被って。そうしなければ人前にも出れない今の自分が、ひどく情けない。

腕の中で眠る我が娘を守ろうと必死にこちらを睨む葵に、最大限の優しい声で話しかける。

「ここで待てば、きっと見つけてくれると思ってた」

よかった。搾り出した声は、昔のままだ。

「……雁夜……くん？」

「……ああ、そうだよ。葵さん。俺は、俺は……」

それ以上、言葉を紡げなかった。

何と言えはいいのだろう。聖杯戦争に参加したと正直に告げるのか？しかし、それはつまり 彼女の夫と、凜と桜の父親と、殺しあうということだ。幼なじみと自分の夫が殺し合いを演じているとわかれば、優しい彼女はきっと苦しむに違いない。桜を失い、凜を危険な目に遭わせてしまったことで、彼女はもう十分に苦しんだ。これ以上、負担を掛けていい道理はない。

遠坂時臣に恨みが無いとは言えない。むぎむぎ桜を間桐臓硯の手に委ねた愚行と桜が受けた責め苦の代償を支払わせてやりたい。そうでなければ気が済まない。だが……自分一人の負の感情で、彼女たちの大切な存在を奪っていいのだろうか？俺は本当に、遠坂時臣を殺せるのだろうか？殺すべきなのだろうか？

苦痛にも似た葛藤が雁屋を苛む。言うべきか、言わないべきか。殺すべきか、殺さないべきか。その二択の狭間で雁夜は精神は磨り潰されてゆく。

(ぐるる)

( ああ、そうだな )

そっと肩に置かれた手から勇気が流れこんでくる。霊体化していても、冷たい鎧に包まれていても、その手は思いやりに満ちていて温かかった。

「必ず、君たちも桜ちゃんも命をかけて幸せにしてみせる。そのために最善の結果を探し続ける。それだけは保証する。信じて欲しい」  
「桜？命？……雁屋くん、どうということなの？あなたは何をするつ

もりなの？……ま、まさか、あなたこの戦争に……！？」

魔術師の妻であるならば、雁屋が纏う魔力や、その背後に佇む人外  
の存在に感づいても不思議はない。これ以上は顔をあわせておくべ  
きではない。彼女のためにも、俺のためにも。

「これでお別れだ、葵さん。俺は君のことを　いや、なんでも  
ない。今までありがとう」

「雁屋くん、待って……！」

縋り付くような細かい声に後ろ髪を引かれながら、それを振り払う  
ように身を引く。

彼女とはもう二度と逢えないだろう。自分はこのまま戦いで命を削  
つて、やがて力尽きるに違いない。だが、せめて彼女たちの  
桜の幸せだけは、掴んで逝きたい。

「お母さん……」

「ぐる……」

実体化したバーサーカーの腕の中で、桜が啜り泣く。バーサーカー  
が助けだした凜を葵の元へ返す際、間桐邸に残すのは危険だと思っ  
て連れてきたのだが、やめておくべきだった。まだ母親が恋しい年  
頃なのに、目の前にいるのに会わせてやれない。今葵に会わせるの  
は危険だし、断腸の思いで桜を手放した彼女に桜の弱った姿を見せ  
るのは酷だと思ったのだ。それは桜に悲しい思いをさせるだけだっ  
た。こんなことなら、バーサーカーを残して自分一人で来るべきだ  
つたのだ。

雁屋は巨大な罪悪感に押し潰されそうになり、顔を俯ける。

「桜ちゃん、ごめん。おじさんは……」

「うっん、いいの。私は大丈夫。おじさんとバースーカーがいるから。それに……」

「……?」

目を真つ赤に腫らした桜が、それでも懸命に笑顔を浮かべる。

「それに、おじさんが必ず幸せにしてくれるって約束してくれたから。だから、私は大丈夫」

「……そうだね。約束したんだ。約束は守らないといけない」

勇気が奮い立つ。握り締める手に力を込め、決意を新たに雁屋は天を仰ぎ見た。

「ねえ、バースーカー。お母さんにバースーカーを紹介する時、なんて言えばいいかな？」

「ぐるる」

「そうだね、そう言おうと！私の未来の　　きゃあ恥ずかしい」

「待て、何と言ったんだ!？」

「ぐるるるる(、(」

「教えなさい、じゃない!」



2・5 うわよう、よつよい（後書き）

余談ではあるが、この事件以降、凜は「桜が、黒桜があああ」と苦しげな寝言を漏らすようになったという。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7068y/>

---

せっかくバーサーカーに憑依したんだから雁夜おじさん助けちゃおうぜ！

2012年1月9日05時14分発行